実体（ousia）探求におけるアリストテレスの照準

——『形而上学』Ｚ巻１章における《ti esti》の問い——[1)]

金　山　弥　平

Meta. Ｚ巻においてアリストテレスは，ousia（実体，substance）とはいかなるものであるか（tis hê ousia, 1028b4），あるいは内容は同じであるが，第１の意味であるものとは何であるか（peri tou houtôs ontos（＝to prôtôs on, 1028a30）theôrêteon ti esti, Z1, 1028b7）という問いを立てて探求を行う。ousia は，Ｚ巻冒頭において ti esti という問いを手掛かりに導入され（Z1, 1028a14-5），３章において，ousia の四つの候補——本質，普遍，類，基体——が数え上げられ，順次それぞれの候補を検討する形で議論は進む。Ｚ巻における ousia 研究の意図に関しては，種々の解釈が行われている。例えば，Owen によると，Ｚ巻の意図は，ousia が有している融和しがたい二側面——tode ti（this）と ti esti（what-is-it or what-it-is）——を，それぞれが向かわんとする相異なる方向へ推し進めつつ，しかも両側から挟み撃ちにすることにより，一つの焦点下に捉えることにある。この二つの方向は，Ｚ巻においてはその冒頭（Z1, 1028a11-12）において tode ti と ti esti という指標によって指示されているが，(1) this（これ）によって言及される個物，あるいは，主語の位置に立ち，述語づけ・分類が適用される対象へ進み行く方向と，(2) what-is-it という問いによって要請される分類・定義，すなわち形相（eidos）に向かう方向とである[2)]。また，Code は，*Meta.* Ｂ巻において提起された重要問題の一つ「原理は普遍的なものか，個々の事物のようなものか」（B1, 996a9-10）——これはさらに B6,1003a5-17において，その内容が説明されている——が，Ｚ巻全体において詳しく取り上げられていると解するが，彼も Owen と同じように，tode ti と ti esti への言及の内に，相反する方向に進む二側面を確認している[3)]。

Meta. Ｚ巻の ousia 概念の内に，上記のような２方向性を読み取ろうとする解釈（これを「２方向解釈」と呼ぶことにしよう）は，根拠のないものではない。その背景には，*Cat.* ５章においてアリストテレスが提示する ousia 理解——第１実体（this によって言及される個物）と第２実体（eidos や genos）の２種類の ousia を認める理解——があり，２方向解釈は，解釈者たち自身が明らかに表明しているいないは別として，第１実体と第２実体の区別を *Meta.* Ｚ巻に持ち込もうとするものなのである。本論文の目的は，この２方向解釈の正当性を吟味すること，それに代わる解釈として，Ｚ巻１章の ti esti と tode ti を統一的に把握する解釈を提示すること，またそれを通して，*Cat.* に見られる第１実体と第２実体の区別を *Meta.* Z1の内に認めることが困難であることを示すこと，さらに，*Meta.* においてアリストテレスが新たに開始した

ousia 探求の試みが，何を照準に捉えようとしているかを少しでも明らかにすること，にある。

Ⅰ．Z巻1章の要旨と解釈上の問題

Z巻1章の内容は次のとおりである。

《1028a10-31》 esti (ある) ということはさまざまの仕方で語られ，従って，on (あるもの) と呼ばれるものにはさまざまの種類のものがあるが，大別すると，(1) ti esti kai tode ti (問題A)[4]と，(2)性質，量など，グループ(1)に属す個々のものに述語づけられる物事とに分けられる。この内，第1の位置を占めるのは ti esti[5]の方であり（これに対して，グループ(2)の各物事は，第1の意味であるものに依存することによって「ある」と呼ばれる)，そして，ti esti は ousia（実体）を問う問いであるから――そのことは人間とか神が ti esti に対する答えとなることから明らかである――，「あるもの」(on)の内で第1の位置を占めるのは，ousia であり，これこそが端的に「あるもの」であることになる。

以上が，1028a10-31の本筋であるが，a20においてアリストテレスは，グループ(2)がグループ(1)に依存することによって初めて「ある」と言われることに関連して脇道にそれる。

《1028a20-31》 グループ(2)に属すものが，グループ(1)の「あるもの」に依存することによって「ある」と呼ばれるところから，「歩いていること」(to badizein)「健康であること」(to hugiainein) など，グループ(2)の物事は，むしろ「あらぬもの」(mê on) ではないかという問題を提起する人がいる。実際，それらはいずれも ousia から「離れてある」(chôrizesthai) ことはありえず，それ自体で成立するものではない。「歩いていること」よりはむしろ「歩いているもの」(to badizon) の方が「あるもの」なのであって，その理由はけっきょく，後者のそれぞれの下には「基体」(to hupokeimenon) が，規定されたものとして(hôrismenon) 存していることにある(問題B)。ところが，この基体となっているものは ousia であり，「個物」(to kath' hekaston) である。こうして，かのもののそれぞれ (kakeinôn hekaston) は，ousia のゆえにあるのであり，従って，ousia が，第1の意味で「あるもの」であり，何かであるもの (ti on) ではなく，端的にあるもの (on haplôs) であることになる（問題C)。

《1028a31-b2》 ousia が第1の「あるもの」であると言われる場合に，ousia は，logos においても，認識においても，時間においても「第1のもの」(prôton) である。すなわち，他のカテゴリーに属すものと異なり，ousia だけが「離れて存在するもの」(chôriston) であるし，また，それぞれの物事の logos の内には ousia の logos が内在していなければならないという意味で，ousia は logos においても第1のものであるし，さらに認識においても第1のものである。すなわち，ti esti（何であるか）――例，ti esti ho anthrôpos, ti esti to pûr――を知ったときに，それぞれのものを十全に知ったことになり，to poion（性質）とか，to poson（量）

とか，to pou（場所）を知ったときではないのである――後者についても，それらを知ったことになるのは，ti esti を知ったときである（問題D）。

《1028b2-7》　古来，人々は「〈あるもの〉とは，一体何であるのか」という問いを設定して，探求を行い，そして，一元論や多元論，また多元論の場合には，有限数の原理を立てたり，無限数の原理を立てたりしているが，「あるもの」を尋ねる彼らの問いは，けっきょく，第1の「あるもの」を求める，我々の「ousia とはいかなるものであるか」（tis hê ousia）という問いに行き着くことになる。そこで，この意味での「あるもの」を考察しなければならない。

以上が，Z巻1章の要旨であるが，そこには ousia，ないしは ousia を導入するためにアリストテレスが手掛かりとする ti esti をどう解釈するか，という我々の中心問題と関連する幾つかの解釈上の問題が含まれている。列挙すると次のとおりである。

《問題A》　ti esti と tode ti は，それぞれ何を表し，両者をつなぐ kai はいかなる関係を示しているのか。2方向解釈によれば，ti esti が，*Cat.* の第2実体を表し，分類・定義・形相・普遍（general, universal）の指標となる表現であるのに対して，tode ti は，*Cat.* の第1実体を表し，個物（particular）の指標となる表現であり，これら内容的に異なる両者が kai (and) で連結されていることになる。しかしまた，kai を「すなわち」の意味で解し，tode ti が ti esti を説明しているとみなすことも可能である。この場合には，当然ながら，*Cat.* の2種類の実体を持ち込んで解釈することはできなくなる。我々はどちらを採用すべきか。

《問題B》　どうして，規定された基体が支えるものとしてあることが，「歩いているもの」等々（tauta, 1028a25; autois, a26）の方が「歩いていること」等々よりも，より一層[6]「あるもの」であることの理由となるのか。

《問題C》　「かのもののそれぞれ」（kakeinôn hekaston, 1028a30）とは何を指すか。tauta（1028a25）や autois（a26）と同じもの，つまり「歩いているもの」等々（to badizon, etc.）を指しているのか，それとも，グループ(2)の物事（「歩いていること」等々，to badizein, etc.）を指しているのか。また，ousia が，何かであるもの（ti on）ではなく，端的にあるもの（on haplôs）である（1028a30-31）とはどういうことか。Burnyeat et al., pp.3-4は，kakeinôn（かのもの）が to badizon, etc.を指すとすると，「ousia が ti on ではない」と言われる場合の〈ti on〉の意味が，〈to badizon, etc. のように，「歩いている何なのか」(badizon ti, walking what?) が常に問われるもの〉という，excessive ingenuity を要求する意味になってしまうと考える立場から，kakeinôn は，to badizein, etc.を指すと考えている。また，「ti on でなく，haplôs on である」という記述については，ingenuity を避ける立場から，「ここでの einai の用法は，incomplete な用法ではなく，complete な用法である」ことを挿入的に注意しているのだと解釈している。この解釈は正しいのであろうか。

《問題D》　ousia は，logos と，認識と，時間の三つの点で第1のものであると語られてい

るが，これは具体的にはいかなることを意味するのか。とくに，時間の点で第1であることの説明を求めると，「他のカテゴリーに属すものと異なり，ousia だけが chôriston である」(1028 a33-34) がそのことの説明になっていると考えざるをえない。しかし，いかなる意味で説明となっているのであろうか。また，認識において第1であることの説明のために用いられている問い——ti estin ho anthrôpos ... ê to pûr (1028a37) や，ti esti to poson ê to poion (b2) ——は，後者の問いはともかくとして，前者の問いは明らかに 1028a11-12の ti esti の問いの事例となるものであるが，これらの問いは具体的には何を求める問いであるのか。

以上四つの問題が，Z巻の ousia 理解と関連して提起される問題である。この内，《問題A》は ousia 解釈に直接関わる中核的問題であり，従って，これをまず最初に取り上げ，その上でその成果を踏まえて，《問題B～D》に対処しようと思う。

II. 2方向解釈の検討

1028a11-12の ti esti と tode ti を，*Cat.* の第2実体と第1実体の区別に即して，最初から区別のあるもの，異なる2方向への指標となるものと解する2方向解釈に対しては，次の疑問が生じてくる。アリストテレスは a14において ti esti に言及すればそれで十分であるかのように，tode ti にはもはや言及することなく，ti esti を契機として直ちに ousia を導いている。このことは，ti esti と tode ti の重なり合い（一致とは言わないまでも）を示唆するのではないか。アリストテレスが，ousia を表す上記二つの概念の内に異なる方向への傾向性をはっきり認めていたとしたら，一方の概念だけ——それも第2の資格しかもたないもの——を通して ousia を導入する道を採ったであろうか。

しかし，この疑問に対しては次のように答えることもできるであろう。a14ff.のアリストテレスの目的は，ousia が第1の「あるもの」であることを示すことにある。そのために ousia と認められるものの一方（ti esti＝第2実体）を取り上げ，これが第1の位置を占めると論じても，議論として何ら問題はないであろう。第2実体が第1の「あるもの」であるのだから，第1実体はもちろんそうである，という言外の含みがあるのかもしれない。

しかし，第1実体に相当するものは，単なる言外の含みにとどまっているわけではない。a30-31の結論に通ずる実際の議論（脇道も含めた議論）において，「基体」が登場し，それが ousia であり，「個物」であると言われるときには，すでに具体的個物としての ousia が表面に出てきている (a26-7)。もちろん，2方向論者に言わせれば，これは言外の含みであったものが表面に出てきただけである，ということになるのかもしれない。しかし，言外の含みという主張が正しいかどうか，具体的個物としての ousia が登場する場面をもっと正確に取り押さえてみることにしよう。

具体的個物は，「歩いていること」などの諸属性の担い手として，つまり諸属性が「ある」こ

とを成り立たしめている「あるもの」として，a18 において tou houtôs ontos（そのような仕方であるもの）という形ですでに現れている[7]。この場合，「そのような仕方で」とはどのような仕方のことであろうか。最も自然な解釈は，「そのような仕方であるもの」を，a14 の「第１のあるもの」を受けた表現と解し，「そのような仕方で」とは「第１の意味で」を表すとみなす解釈であろう[8]。この解釈によると，a18ff.において，第２グループに属す「他のもの」が「あるもの」と呼ばれる理由も，「第１の意味であるものの，量，性質，等々であるから，それに依存して」という形で自然に理解できる。ところが，「第１の意味であるもの」とは，a14 によれば ti esti の答えとなるもの（to ti estin）であった。従って，a14-18の議論においてアリストテレスの意識の中では，「to ti estin」＝「第１の意味であるもの」＝「そのような仕方であるもの」＝「諸属性の担い手となる個物」という図式が何の無理もなく成立していると考えられる[9]。a14 と18の間で，「第１の意味であるもの」＝「そのような仕方であるもの」が指示するものが，何の警告もなく突如として to ti estin から，具体的個物に変わっているのでないとするならば，具体的個物としての ousia は言外の含みとなっていたというよりむしろ，すでに最初から視野の中に捉えられおり，ti estin は，内容的に個物に通ずるようなものであることになる。従ってまた，ti esti と tode ti を結ぶ kai (a12) は，説明をする表現であって，「すなわち」(i.e.) を意味するものと解される。

では，その場合に，ti esti と tode ti とが「すなわち」で結びつけられるような関係にあるとは，どういうことであるのか。ti esti と tode ti を，それぞれどのように解釈したときに，後者が前者を説明するような関係に立つことになるのか。Frede/Patzig は，次のように考えている[10]。ti esti を問う「ソクラテスは何であるか」という問いに対する答え「ソクラテスは人間である」の「人間」を，普遍を表す述語と解する場合も確かにあるが，むしろその述語によって，偶有的諸属性が帰属してはいるが，それら諸属性と対比される個別的人間が表されていると解することも可能である。例えば，*Meta.* Θ7, 1049a35 では，述語づけられている個別的形相（eidos ti）を説明して，tode ti という表現が使用されている。

確かに，ti esti と tode ti が異なる２方向への傾向性をもつという先入見なしに，Ｚ巻を読んでいこうとする Frede/Patzig の読み方は十分評価されるべきものであるし，また，アリストテレスの立場によると結局は，ousia が tode ti であるとは，ousia が eidos ti であるということに行き着くのかもしれない。しかしどうしてそうなるのか。Frede/Patzig の説明だけでは，明らかになってこない。例えば，「ソクラテスは人間である」の「人間」を，普遍を表す述語と解する場合があるとしたら，さらに，そう解するのが普通であって，*Cat.* の第２実体に見られるように，アリストテレスがかつてそのように解したのであるなら，彼はどうしてＺ巻１章においてその可能性がまったくないかのように，ti esti kai (i.e.) tode ti と言うのであろうか。また，1028a12 の tode ti を，eidos ti と書き換えてしまってよいのか。アリストテレスにとって，tode ti であれば必ず eidos ti であるわけではない。例えば，1029a28-30によれば，何かが離在

的 (chôriston) であって，tode ti である場合は，そのものは eidos であるか eidos と hulê の合成体であるかのどちらかである。すなわち，eidos ti よりも tode ti の方が広い概念であり，狭い方の概念を介在させて，より広い概念の tode ti と to ti esti とを結びつけることには直ちには賛成できないのである。両者をもっと直接的に結びつける方法はないのであろうか。

III. 個物の同定を目指す ti esti

III－I. 同定とは何か

ti esti の問いは，いかなる内容の問いであり，いかなる答えを期待しているのだろうか。Frede/Patzig は，ti esti の問いに対する答えの事例として，「ソクラテスは人間である」(Sokrates ist ein Mensch) も挙げていれば，「これは人間である」(Dies ist ein Mensch) も挙げており，どちらでも違いはないかのように論じている (e.g., vol.2, p.14)。しかし，本当に違いはないのだろうか。今ここで，いずれの答えも第三者による言い直しではなく[11]，答え手本人の言葉であるという想定のもとに，それぞれの問答の状況を考えてみよう。

一般的に言うなら，(a')「ソクラテスは人間である」(Sôkratês estin anthrôpos) という答えは，(a)「ソクラテスは何であるか」(ti esti Sôkratês) という問いに対する答えであり，(b')「これは人間である」(tode estin anthrôpos) という答えは，(b)「これは何であるか」(ti esti tode) という問いに対する答えである[12]。ところが，(a) と (b) とは，それぞれ異なる意図をもつ質問であるように思われる。すなわち，一般的に言って，ある人が (a)「ソクラテスは何であるか」と問う場合には，質問者は，目の前のものをソクラテスと同定し，了解した上で尋ねている。そして，その了解の内には，「プラトンの師」「獅子鼻で出目の男」「哲学者」「毒杯をあおいで亡くなった人」「人間」「動物」等々の理解も含まれ，そうした暗黙の了解に立って，このソクラテスは何であるか，ソクラテスは何に分類できるか，が尋ねられている。すなわち，質問 (a) が発せられるときには，たいていの場合，分類，定義，形相，普遍への方向性をもつ問いとして，ti esti は最初から意図されているのである[13]。

これに対して，(b)「これは何であるか」と問う場合には，むしろ，目の前のものを，特定の何ものかとして了解することなしに「これ」という形で指し示し，そのものの同定を求めている[14]。同定においては，「これは人間である」の場合のように，しばしば形相に着目されるが，しかし，ti esti の問いは，それ自体が初めから分類を意図しているわけではなく，また普遍への方向性もその問い自体の内に初めから含まれているわけではない。同じ ti esti の問いであっても，それが語られる状況，意図に応じて，それが発展していく方向は異なるのであって，そうだとするなら，答えについても同じことは当てはまり，(a') (b') を内容に違いがないかのように論ずることはできないであろう。

では，*Meta.* Z1,1028a11-12の ti esti は，(a)→(a') と (b)→(b') のどちらの方向性をもつ ti

esti なのであろうか。1028a15-18においてアリストテレスは，ti esti が ousia を問う問いであることを示すために，poion ti tode(これは，いかなる性質のものであるか)という問いと，ti estin という問いを比較して，人間や神のような ousia が答えとなるのは後者の問いである，と述べている。ti estin の主語は表されていないが，補われるべきは当然，poion ti tode において主語であった tode であろう。こうして，少なくともこの箇所から見るかぎり，Z巻の ti esti は，同定を求める(b)→(b')の方向性をもつ問いであると言える。そして，この同定を目指す問い(これは何であるか)から答えとして導かれ，指摘されるものが，アリストテレスにとって ousia であり，tode ti という説明を受けるものなのである。

そこで次に，同定を目指す問い（あるいはむしろその答え）を説明する役割を，本当に tode ti が果しうるのか，その語そのものの意味に即して検討しなければならないが，その前に「同定」(英語の動詞を用いるなら，identify）ということで我々が何を意味しているのか，もっと明確にしておかなければならない。ただ単に「同定」と言うだけでは，余りにも漠然としているからである。さらにまた，「同定」で何を意味するか我々が限定を加えていくなら，必然的に，同定の対象も一定の制約を受けることになるが，その制約が，アリストテレスが ousia の規定として語っている事柄と一致するかどうか，この点も，我々の解釈を検討する手始めに吟味しなければならない。

ti esti が「同定」(identify）を目指す問いであると言うことで，我々は何を意味しているのか。*Oxford English Dictionary*; identify 2.の項には次のように記されている。To determine (something) to be the same with something conceived, known, asserted, etc.; to determine or establish the identity of; to ascertain or establish what a given thing or who a given person is; in *Nat. Hist.* to refer a specimen to its proper species. 事例として挙げられている The owner of the goods found them in the possession of the thief, and identified them.という文を手掛かりに説明を試みることにしよう。(i)まず第1に，同定されるものは，目の前にあり，「これ」と指定できる具体的な個物である。財布を掏られた人が自分の財布を同定して「返せ」と要求するとき，彼は，財布一般を同定してはいないし，また目の前に見えないものを同定しているわけでもない。

(ii)第2に，同定される個物は，何らかの特徴を備えており，それへの着眼によって同定は行われる。何か目印がなければ，自分の財布だと同定することはできない。ただし，その特徴(目印）は，同定される特定の個体だけに特有でなくてもよい。他の個体も同じ特徴をもっていること（そして，人の財布を自分のだと間違えて同定すること）はありうるわけだし，また同じ種類に属する個体が共通してもっている特質（例えば，いかなる人間も人間であるかぎり有している特徴，アリストテレスの用語で言えば広い意味での idion[15]) に着眼して，目の前の人を「人間」と同定することもできるのである[16]。

(iii)第3に，同定される個物が有している特徴は，ある程度持続してその個体に属するもので

なければならない。財布の持主は，掏りが目印を消さないかぎり何度でも自分の財布を同定できるし，掏りの顔を見知ったら，掏りが変装か整形手術をしないかぎり，何度でも彼を同定できる。特定の個体として同定する場合には，その特徴は個体が存続しているかぎりそれに属している必要はないが[17](目印が消されても，もとの持主の財布でなくなるわけではない)，特定の種類のものとしての同定の場合には，着眼点となる特徴は，その個体が存続するかぎりそれに属し続けるような特徴である。

(iv)第4に，同定においては，対象が確定され，認識が成立しているが，しかし，確定，認識のされ方にも種々の段階が考えられる。例えば，(1)目の前の何かを，白いものと認識する段階，(2)それをさらに人間と認識する段階[18]，(3)それをさらにソクラテスと認識する段階。一般に我々が何かを同定する場合，(iii)で指摘したように，我々が着目する特徴は，同定されるものに持続的に属しているものでなければならない。そして，我々も，同定されるものに持続して属していることが分かっている特徴に行き当たるまでは，何かを同定したとは考えない。例えば，(1)の目の前に何か白いものが見えただけの状態では，その白いものが，実際に一つのものか，それとも二つのものなのかも分からないし，たとえ一つのものだと分かっても，目の前の白い色を，持続的に属している特徴だと認定するすべがないから，我々は何ものかを同定したとは考えない。(2)に至ってはじめて，目の前のものは，持続的な統一性をもったものとして把握されており，この段階で我々は何かを同定したと考えるのである。その意味で，「同定」と言われる場合には，通常(2)の段階が考えられており，(1)の段階は考えられていない。また，(3)においては，さらにそれが個別的な特徴も含めて捉えられており，一般の用法ではこれも同定と呼ばれるが，アリストテレスの解釈としては，この(3)の段階は ti esti の答えが要求するものに含まれないと，我々は考える（このことは後で示す)。

III－II．同定の対象としての ousia：《問題B》への解答

次に，以上のような同定によって導かれ，指摘されるものが，*Meta.* Z巻で探求の的になっている ousia であるという，我々の解釈が正しいかどうか検討するために，同定の対象について我々が指摘した上記四つの特徴が，アリストテレスの ousia 規定と一致するかどうかを調べてみよう。

アリストテレスは，1028a26-7において，「歩いているもの」等々の下にある基体を説明して，これが ousia であり，個物であると言っている。ここで ousia と個物をつないでいる kai は，「すなわち」を意味しており，今述べた基体とは ousia，すなわち個物である，と言っているのであろうか，それとも，二つのものを連結・付加する kai であって，基体となっているものは，ousia であり，また個物でもあると，基体に関する説明を重ねているのであろうか。Frede/Patzig は，この箇所の kai to kath'hekaston (28a27)を，a11-12の kai tode ti と関係づけて，後者の kai が epexegetisch であることの一根拠として，a27 の kai が epexegetisch と解され

ることを指摘している（vol.2, p.15, also cf.p.19)。確かに，彼らの言うことをそのまま受け取ることができれば，我々の解釈の(i)の点は，アリストテレスの論点でもあることが確証されたことになる。しかし，Frede/Patzig にならって，a27 の kai を epexegetisch と解することには，そのままでは賛成できない(後から述べる意味で結局は賛成するとしても)。第1に，彼らがこの kai を epexegetisch とみなす根拠として挙げている点が，実際に根拠となるかどうか，疑わしいからである。彼らは，a30 でアリストテレスが tauta の代わりに tautên を使っているのは，to kath'hekaston が hê ousia の epexegetisch な追加であるということから理解できると言っている。しかし tauta が指示するものは何か。a25の tauta が彼らの念頭にあるとすれば，その代わりに tautên が使用されてはならないはずである。なぜなら，a25-7において(autois とそれを支えている to hupokeimenon hôrismenon とはもちろん異なるのであるが）autois＝tauta，to hupokeimenon hôrismenon＝hê ousia kai to kath'hekaston という関係が成立しており，そして彼らも認めるとおり(p.19)，tautên（a30)は a27 の ousia を受けるからである。

さらにまた，Z3, 1028b34-36で提示される ousia の四つの候補の中に個物が含まれていないこと，また，1029a29-32において，形相と個物(形相と質料の合成体)が ousia の候補として挙げられながら，（理由はともかくとして）個物の可能性は取り上げられないという事実もまた，ousia なら必ず個物であるという意味で，kai to kath'hekaston(28a27）が epexegetisch な説明をしているという解釈を遠ざける要因となる[19]。もしも epexegetisch として解するなら，むしろ，「基体となっているものは ousia であり，それはまた目の前の個物として我々が考えているものである」という意味で，epexegetisch であると解すべきであろう[20]。だとすると，kai を連結・付加の意味でとるのと変わりはなくなるであろう。実際，a26-9の議論の中心になっているのは，「何かが ousia であること」よりむしろ「何かが基体としてある」ということであるから，その基体としてあるものについて，それは ousia であり，また個物である，という形で二重の説明がなされていると考えるべきである。従って，アリストテレスにとって，ousia の同定において対象となっているものは，個物でなければならない。この ousia に関する制約は，我々の解釈の(i)によって確かに満たされている。

また，アリストテレスは 1028a25-27において，「歩いているもの」「座っているもの」「健康なもの」などが，「歩いていること」などよりも，より「あるもの」であることの理由として，「歩いているもの」の下には，基体が規定されたものとして（hôrismenon）存していることを指摘し，この基体が ousia であると言っていた。この箇所から二つのことが言える。(1)アリストテレスにとって個物は ousia であっても，それを「歩いているもの」と把握しただけでは，ousia を把握したものとは認められず，また，「歩いているもの」はそのままでは ousia ではない。(2)それは，「歩いているもの」が，規定された基体（＝ousia）によって存在性を付与されており，そして存在性を付与するものと付与されるものとは異なるからである。我々が，アリストテレスの ousia についていかなる説明を与えるにせよ，それは，(1)の条件を満たし，同時に(2)の意

味を説明するものでなければならない。ところが，我々の解釈の(iv)は，まさしく(1)を満たすとともに，(2)の意味を説明してくれる。すなわち，(iv)の説明の「白いもの」を「歩いているもの」で言い換えるなら，まず「歩いているもの」というだけでは，そのものが一つのものか，二つのものかも分からず，厳密に言えば，単数形で，to badizon と言うことすらできない[21]。to badizon と言うことができるためには，歩いている何ものかの中核となり，それを支えている ousia (例えば，人間) が把握されなければならず，その時はじめて，一つのもの，つまり他と区別され，規定された (hôrismenon) 持続的なものが，そこに成立していることが分かり，to badizon と単数形で言うこともできるようになるのである[22]。また以上のことによって，先に挙げた《問題B》も答えられたことになると思う。すなわち，「歩いていること」等々では，実際に歩いているものは，一つのものかどうかも分からないが，単数形で「歩いているもの」と言われるときには，一般にその発言の前提として，人間とか，馬とか，何か単一の境界づけられた個物があることは明らかになっているのであって，その意味で，「歩いているもの」の方が「歩いていること」よりも，より一層「あるもの」なのである。

また，アリストテレスは 1028a17-8において，ti esti の答え (つまり ousia) の例として人間と神を挙げている。このことは，我々が(iv)で指摘したとおり，(2)の段階の同定をアリストテレスは考えており，(3)の段階は念頭に置いていないことを示唆するものとも解釈できる。我々としては，この解釈をとりたい。しかし，ひょっとしてただ言及しなかっただけのことかもしれない。従って，ti esti の答えに「ソクラテス」のような個物の名前をも許容できるかどうか，という問題は，後の探求課題として残しておこう。

Ⅳ. ti esti kai tode ti (1028a11-12)：《問題A，C》への解答

以上，我々の解釈によって「アリストテレスにとっての ousia とは，ti esti tode という問いに対する答えとなるものである」とした場合に，ti esti kai tode ti をどう解するか，という先の《問題A》に対してどう答えることができるであろうか。我々は，kai は，「すなわち」を意味するものと解する。しかし，tode ti は，ti esti を説明するような意味をもちうるのであろうか。

tode ti という解釈の困難な表現[23]については，Smith, p.19が次のような説明を与えている (これを解釈1としよう) ——この表現は，a class of ti's or 'somewhats'があって，その中のメンバーを tode (これ) と任意に指定する表現でもなければ，the class of this's があって，その中の任意のメンバーを，ti という不定代名詞によって選び出す表現でもない。tode (this) は，「これ」と指定できる singular であることを表し，ti (somewhat) は，「人間」や「牛」などの普遍的種類を表す語の代わりに用いられている。従って，tode ti の表すところは，"'a designated somewhat'——a placed and dated specimen of some definable and substantial

nature or kind" としてまとめられる。我々としては，この解釈１を採用したいが，しかしまた，anthrôpos tis などの表現との類推から，ti ではなく，tode が種類を指定する役割をもっているとする解釈もある（解釈２と呼ぶ）[24]。解釈１と解釈２のいずれを選ぶべきかは決定困難ではあるが，少なくとも，ti esti (1028a11-2) に関する我々の解釈は，解釈１によく適合している。

すなわち，ti esti（何であるか）とは，個物を指して，ti esti tode（これは何であるか）と尋ねる問いである。だとすれば，例えば「人間」という普通名詞による答えが出た場合でも，分類のための答えではなく，同定のための答えである以上は，「人間」によって指摘されているものは，人間一般ではなくて，目の前の「この人間」であることになる。その意味で――あるいは，「人間」という普通名詞による答えによって，同定される個物が見失われて，普遍・一般の方へ焦点が拡散してしまわないように――，アリストテレスは，tode ti「この何か（これであり，何かであるもの）」という表現を付け加えているのである[25]。つまり，２方向解釈が主張しているように，ousia には個物（tode ti）と普遍（ti esti）の融和しがたい２側面があって，アリストテレスはそれを一つの焦点のもとに捉えようと苦心しているのではない。むしろ逆に，個物にはその中核に ousia があって，それのゆえに個物は一つのものとして成立しており，また我々も，個物の同定にあたってはそれに注目して，目の前の個物を，例えば「人間」と呼んでいる。ところが，中核をなしている ousia が，「人間」のような普通名詞によって表されるものであるために，客観の側では乖離は存在しないのに，我々の側で，その ousia を個物から引き離す傾向にある。そして，それを避けるために，アリストテレスは，tode ti という説明を kai（すなわち）を用いて加えているのである。

また，今の問題との関連で，先に挙げた《問題Ｃ》にもここで答えておきたい。これによっても，tode ti の解釈として，どちらかと言えば解釈１の方がよいこと，また，ousia が，我々が説明したような意味で，個物の中核をなすものであることが明らかになると思う。Burnyeat et al., p.3は，1028a30 の kakeinôn hekaston について，kakeinôn（かのもの）はグループ(2)の物事（「歩いていること」等々，to badizein, etc.）を指しているとする立場から，次のように言っている（彼らの考えの筋道をはっきりさせるため，だいぶ言葉を補っているが，許していただきたい）――(i) 1028a29-31においては，「ousia のゆえに kakeinôn hekaston がある」から，「ousia が ti on ではない」という結論が導かれている。これは，前者の発言の内に含意されている事柄「ousia と kakeinôn hekaston とは異なる」が，後者において「ousia と ti on とは異なる」という形で明確化されているのだと考えられる。従って，kakeinôn hekaston はそれが何を指すのであれ，ti on という資格のものであることになる。こうして，もしも kakeinôn が「歩いているもの」（to badizon, etc.）を表しているとすれば，to badizon, etc.は ti on であることになる。しかし，to badizon（歩いているもの）が ti on（何かであるもの）である――そして，haplôs on（端的に・無条件的にあるもの）ではない――とはどういうことであろうか。

ousia (例えば，人間) との対比を通して考えるなら，おそらく次のことを言っているのであろう——ousia の場合は，「これは人間である」と言えば，さらに重ねて「人間である何なのか」と尋ねられることはないが，to badizon の場合は，「これは歩いているものである」と言っても，説明を受けた方はそれでは納得せず，さらに「歩いている何なのか」と問うことであろう。その意味で，「人間」の場合とは異なり，「歩いているもの」は，それだけで完結した「あるもの」「端的にあるもの」ではなく，「何かであるもの」であり，この「何か」の部分が埋められるべきものなのである。このようにして，一応 ti on(a30-31)の説明はつくことになる。しかし，(ii)これは，ti on に関して excessive ingenuity を要求する解釈である。そもそもこのような説明をしなければならなくなったのは，kakeinôn が to badizon, etc.を指すと考えたからである。むしろ，kakeinôn は to badizein, etc.を指すと考えるべきなのである。

以上が Burnyeat et al.の推論であるが，これには問題が二点ある。まず(ii)と記した点について，ingenuous だからといって間違っていることにはならない。むしろ，ti on をこのように解する必然性があれば，たとえ過度に ingenuous であっても採用すべきである。そして実際，我々はこの解釈を採用する。しかしその場合，「ti on でない」ということで，「to badizon, etc. でない」ということをアリストテレスが言っていることになるが，だとすると，我々は，kakeinôn が to bazizon, etc.を指していると解するのであろうか。否。むしろ(i)の推論は必ずしも成り立つとはかぎらないと，私には思われる[26]。

我々の立場は次のとおりである。(a)本論文Ⅰ章のZ巻1章要旨《1028a10-31》において示したように，Z巻1章全体の重点は，グループ(2)とグループ(1)を区別し，前者は後者に依存して初めて「ある」(a18-20)ことを示すことにある。従って，《1028a20-31》の脇道も，この重要なポイントに帰ってくるべきものであり，kakeinôn はグループ(2)のものを指す[27]。また，kakeinôn (かのもの) は，どちらかと言えば，位置的あるいは心理的に遠くのものを指す，という一般的原則も (決定的根拠とはならないが)，それが直前にある「善いもの」「座っているもの」ではなく，むしろグループ(2)に属すものを指すことを示唆する。そして，かなり決定的な根拠になると思われるのは，「善いもの」「座っているもの」(a28-29)といった，to badizon, etc. の事例に言及した直後に，それに付加する形で kai を伴って「かのものもまた」(kakeinôn, a30) と言われているという事実である。つまり，「かのもの」が指すものは，to badizon, etc.とは異なるもの，つまり，グループ(2)のもの(to badizein, etc.) なのである。

(b)しかしだからと言って，ti on もやはりグループ(2)のものを指すことにはならない。kai (もまた) (kai *in* kakeinôn, a30) の使用は，アリストテレスの念頭にあるのがグループ(2)のものだけではないこと，to badizon, etc.も，ousia に依存して「あり」，そして ousia とは異なることが意識されていることを示唆するのであり，だとすると，hôste(a30)以下において，再び，to badizon, etc.のことを考えて，ousia が ti on でないと言っても，何ら差し支えないことになる。

(c) Burnyeat et al., pp.3-4は，*SE* 166b37ff.や *Phys.* 190a32 を参照して，on haplôs *vs.* on ti の区別を，complete einai *vs.* incomplete einai の区別であるとしている。しかし，彼らも認めるとおり，こう解すると kai ou ti ... haplôs (a30-31)は，parenthetical と考えざるをえなくなる。もちろん，これが無理な読み方であるというつもりはないが，しかし，問題の句を議論の本筋から引き離して読むよりは，議論全体の中で意味をもつ句として読むことができれば，その方がよいことは確かであろう。そして，アリストテレスの用例を見ても，complete einai *vs.* incomplete einai の区別が，on haplôs *vs.* on ti の区別に関する唯一の解釈ではないのである。Frede/Patzig, vol.2, p.19は，*A. Pst.* 83a30-32に言及しているが，これよりもむしろ，*A. Pst.* 73b5-8の方が分かりやすいであろう。この箇所でアリストテレスは，*Meta.* と同じ to badizon の例を挙げて，「何か他のものであって」(heteron ti on) はじめて badizon であるところの to badizon と対比させて，ousia は何か他のものであることなくして，まさにそれであるところのものであると語っている。また，*Meta.* Z1, 1028a28-9において，「善いもの」とか「座っているもの」とかが，基体となるものなしには語られないと言われていることもまた，我々が何かを「座っているもの」と呼ぶときには，必ず，座っている何か(ti)を念頭に置いているという事実を指摘するものであろう。従って，少なくともアリストテレスの ti on の用法に従うかぎり，我々が採用しようとする解釈に何ら不自然な点はないことになる。そして，すでに述べたように，ousia が，ti esti tode によって同定を求められたときの答えとなるものであるならば，ti on（何かであるもの）は答えとなるにはふさわしくなく，端的にその何かであるもの(haplôs on)が指摘されて初めて，ousia が答えられたことになるのである。こうして，我々の解釈によって，kai ou ti on ... haplôs は，議論全体の中で的確な位置を与えられることになる。

V．2方向解釈からの反論

以上の我々の解釈（これを同定解釈と呼ぶことにしよう）に対して，2方向解釈の論者は次のように反論するかもしれない。

《反論1》　アリストテレスは，*Cat.* において2種類の実体を区別して次のように言っている。

> 最も厳密に，かつ，第一の意味で，そしてとりわけ ousia であると言われるのは，（主語となる）何らかの基体について（kath'hupokeimenou）語られたり，何らかの基体の内に(en hupokeimenô(i)）存したりすることのないもののことである――例，個々の人間や個々の馬。これに対して，第1の意味で ousia と呼ばれているものがその内に属している種（形相，eidos）やそれら種の類（genos）は，第2の ousia（第2実体）であると語られている――例えば，個々の人間は，人間という種の内に属しているし，また動物がこの種の類である。従っ

て，これら――人間と動物――が，第2のousiaであると言われるのである（2a11-19)。

また，2b7-28は，種と類のいずれがより一層ousiaであるか，という問題を扱い，第1実体(個物）が何であるか，ということがよりよく分かるのは，類よりも種を指し示すことによってであること，および，個物が他のものの基体となっているように，種は類の基体となっていること，等の事実に着目し，種の方が類よりもより一層ousiaであると結論づけているし，さらにまた，第1実体相互の間には――例えば，個物としての人間と個物としての牛を比較した場合には――，ousiaの程度に差異がないことも指摘している。また，tode tiという表現については，3b10-20で次のように記されている。

第1実体がtode tiを表していることは，議論の余地のない真実である。・・・第2実体については，・・・これも同様にtode tiを表しているようにも見えるが，・・・むしろpoion ti（何かこれこれ様のもの）を表している。なぜなら，・・・人間や動物は，多くのものについて語られるのであるから。・・・ただし，白のように無条件的にpoion tiを表しているのではなく，・・・種と類は，実体に関してこれこれ様だとの限定を行っているのである。

以上の証言から，*Cat.* の実体論は次のように要約できる。およそ個物であるところのものが，基本的な，第1のousiaであって，これはtode tiを表す。これに対して，これこれ様のものであることを表すにすぎない種（形相）や類は，第2実体の位置しか与えられず，その中でも，第1実体に近い種（形相）の方が，類よりもより一層ousiaであるとみなされる。ousiaに関するこの *Cat.* の区別が，*Meta.* Z巻においても，何の変更も加えられることなく残存しているとすれば[28]，我々はZ巻の内にも，第1実体と第2実体の2方向を認めるべきことになる。

《反論2》　第1実体と第2実体の区別を認める場合，第1実体については次の点を指摘できる。アリストテレスは，Z3, 1029a33-4において，感覚的ousiaiの内の幾つかがousiaiであることは同意されており，従って，まずこれらの中で探求しなければならないと述べている[29]。同様の発言はH1, 1042a6-8; 24-25にも認められ，後者においてもこれらの感覚的ousiaiを考察の出発点としようと言われている。だとすると，結局アリストテレスにとっては，個物としての人間とか馬といった感覚的ousiaiは，広くousiaiとして認められており，これらが異論のない事例であるから，それらの中でアリストテレスはZ巻の探求を進めるのではないか。そして，このことは，アリストテレスが *Cat.* の第1実体の思想を保持していることを意味するのではないか[30]。

《反論3》　また第2実体を示唆するものも，Z巻1章の内に認めることができる。例えば1028a36-b2によると，各々のものを知ったと我々が思うのは，ti estin ho anthrôpos ê to pûrを知ったときであって，to poion ê to poson ê to pouを知ったときではない――後者について

も，それぞれを知ったことになるのは，ti esti to poson ê to poion を知ったときであるから。これが，ousia が第1のものであることを示す議論であることを思えば，アリストテレスにとっての ousia とは（あるいはその一部は），ti estin ho anthrôpos ê to pûr のような，定義の意味での「何であるか」の問いによって求められているもの，つまり，*Cat.* の第2実体であるということになるのではないか。さらにまた，logos において ousia が第1のものであることを示すために，それぞれのものの logos の内には ousia の logos が内在していなければならないと，アリストテレスは論じているが(1028a34-36)，この logos が「定義」を意味し，例えば，性質「白」の定義には，「物体」のような ousia の定義が内在しなければならないということであれば，ここでも，ousia とは定義の対象となるようなものであることになる。そして，Z15, 1039b27-29 に見られるように，感覚的個物には定義が成り立たないとすれば，ousia は，*Cat.* の第2実体のようなものとして考えられるべきことになる。だとすると，Z巻冒頭の ti esti も，定義の対象，第2実体を表すと考えるべきではないか。

《反論4》　また，たとえ同定解釈に従って，ti esti が，目の前の tode を同定する問いであると考えるとしても，同定は「人間」という普通名詞による同定に限られず，「ソクラテス」と同定する場合もある。そして，このような形で同定された個物を，tode ti が表している可能性はないであろうか。もしもこれを受け入れれば，*Cat.* の第1実体の思想を自動的に受け入れることになるのではないか。

《反論5》　Z巻3章では，ousia の候補として，本質，普遍，類，基体が出てくるが，基体は，tode ti から，本質，普遍，類は，ti esti から出てくるものとして，2方向解釈によればうまく説明がつく。これに対して，同定解釈ではどのように四候補は説明されるのであろうか。また，Z巻3章における，基体の一候補としての質料の資格を検討する議論も，2方向解釈によってうまく説明できる。すなわちこの議論は，tode の方向を突き詰めて行き，tode を toionde（つまり，ti esti)から切り離そうとする試みを吟味する箇所として理解でき，そしてZ巻の4章以下は，この試みが失敗した後を受けて，今度は，toionde に向かうものとして理解できるのである[31]。つまり，質料が基体として認められないことを示す議論は，tode を toionde から切り離すことはできず，二つの側面は一つの焦点の下に捉えられなければならないことを示す議論なのである。

《反論6》　あるいは，Code の言うように[32]，Z巻はB巻のアポリアに対する答えの試みであるとするならば，やはり個物と普遍の問題が検討されていると考えねばならず，そして，その問題のポイントが，tode ti および ti esti として提示されていると解するのは当を得たことではないか。

以上の反論に対して，同定解釈はどう答えることができるだろうか。

Ⅵ．同定解釈からの応答

Ⅵ－Ⅰ．《反論６》《反論１》への応答

上記の反論に対して，《６》《１》《２》《３》《４》《５》の順序で答えようと思うが，その前に次の点を注意しておきたい。《反論５》において明らかにされているように，２方向解釈は，Ｚ巻におけるアリストテレスの意図を，普遍と個物の２側面を一つの焦点の下に捉えることの内に認める。この点については，我々も異を唱えようとは思わない。また，Ｂ巻のアポリア――原理は普遍的なものか，個々の事物のようなものか (B1, 996a9-10)――に対する解決をＺ巻の内に読み取ろうとする Code に対しても，その試み自体をとやかく言うつもりはない。我々が疑問視しているのは，Ｚ巻１章においてアリストテレスが，tode ti と ti esti によって個物と普遍の緊張関係を表そうとしているという主張，また，それが，あたかも存在そのものに含まれる緊張関係であるかのように捉える解釈なのである。もちろん，アリストテレスは，自分の ousia が個物と普遍の２方向に乖離していく傾向は意識しているであろう。*Cat.* で２種類の実体を区別していた彼が，その傾向に気づかないはずはない。しかし，そのことは，彼が ousia それ自体に２面性を認めていたことは意味しない。むしろ ousia は，すでに指摘したように，ti esti の問いへの答えとなる一つの統一をもったものなのである。ところが，この一なる ousia を我々が理解しようとするとき，すなわち，我々が世界を分別し，理解しようとするときには，どうしても個物から離れていかざるをえない――そもそも認識は，共通性にもとづき，共通のものを把握するという仕方で成立するのであるから (cf. Z10, 1036a7-8)。そしてそれゆえに，原理が普遍か個物かという問題，あるいは原理の可知性に関する問題も生じてくる。M10, 1086b20-1087a4 に記されているその問題[33]を要約してみよう――原理が個物であるならそれは可知的 (epistêta) ではなくなる。なぜなら，知識は普遍について成り立つから。他方，原理が普遍であるなら，実体でないものが実体よりも先なるものになってしまう。なぜなら，普遍は実体ではないが，原理は，それを原理として成立しているものよりも先なるものであるから[34]。このように，普遍 vs.個物の問題は，アリストテレスが ousia に２面を認めているからというよりは，むしろ，原理の可知性をめぐって生じてきている。そしてさらに，Code は，Ｂ巻１章と６章のアポリアの定式化にあたり，原理 (principles) を ousia (primary substances) に置き換え，ousia に関する普遍 vs.個物の問題としているが(pp.4-5)，しかし，あくまでも問題は，原理が普遍か個物かというものなのである(B1, 996a9-10)。もちろん，Code, p.4のように，996a9-10を“Are the principles (archai) of things universal or particular?” と訳し，tôn pragmatôn を archai にかけるなら，ここの箇所を ousia に関する問題提起と読むこともできるかもしれない。しかし，tôn pragmatôn が archai と非常に離れていることを考えれば，多くの訳者がしているように，tôn pragmatôn は ta kath'hekasta にかけた方がよいと思われる。それに，996a1-2のアポ

リアが，logosにおける原理も存在論的原理も含む，原理一般に対する問題として提起されていることを思うと，996a9-10のアポリアも，logosにおける原理も含めた原理一般に関するアポリアとみなした方がよいように思われるのである。

また《反論1》のように，*Cat.*の実体論を*Meta.*に読み込むのは正しいのであろうか。例えば，Düringは，*Cat.*を，前367-347年のアカデメイア時代に，*Meta.* ZHΘの各巻を，334年以降の第2アテナイ滞在時から，322年の死に至るまでの時期に設定しているし，またRossは，hulêという用語とその概念が*Cat.*も含めて『オルガノン』全体の内に現れてこないことの理由の一つとして，この初期の段階において，アリストテレスがその概念をもっていなかった可能性にも言及している[35]。もちろん，これだけのことから，Z巻においてアリストテレスが初期のousia概念に変更を加えた，と主張することはできない。むしろ我々は，Z（およびHΘ）巻のousia概念を内部に立ち入って調べてみなければならず，その上ではじめて，*Cat.*との異同についても発言をなすことができるのである。

VI－II．感覚的ousiaiの位置付け：《反論2》への応答

《反論2》の根拠とされているZ3, 1029a33-34およびH1, 1042a6-8; 24-5の箇所を見てみよう。まず，H1, 1042a6-8は，Z巻2章の要約であること[36]，および1029a33の同意は，2章の同意を受けていることに注意しなければならない。では，Z巻2章を見てみると何が言えるのであろうか。1028b28-31では次のように記されている。「感覚的ousiai以外に何かousiaiがあるかいなか・・・を探求しなければならない」。ここでは，すでに感覚的ousiaiの存在は確実であって，それに加えて他にもousiaiを認めることができるかどうかを探求しなければならない，と言っているように思われる。しかし，2章のもっと前を見てみると，いわゆる感覚的ousiaiの全部がousiaだとは限らない可能性（toutôn tines, 1028b14），あるいはさらに感覚的ousiaiが実際にはousiaでない可能性（toutôn men outhen, b15）も認められているのである。同じ章において特に証明もないまま，感覚的ousiaiの存在を確実視するとは考えにくい。

確かに，1章で人間や神はousiaとされている。これらをそのまま個物としてのousiaとして認めてよいかどうかは議論が分かれるところであろうが，しかし，たとえそれらが感覚的個物であるとしても，いわゆる感覚的ousiaiのすべてがousiaであることが確立していることにはならない。一部の人々には別のものがousiaであると思われている（1028b16）こととの対比において，一般に同意されている（1029a33）だけのことであり，一般的同意をもとにしてousiaが一体何であるのかを明らかにし，再度，同意されているものに立ち返り，何がousiaであるかを決定することもありうるのである。そして実際，1028b9-13で挙げられている事例の内には，動物の身体の部分や，土，火，空気のように，ousiaとは認定されないものも出てくる[37]。従って，感覚的ousiaが異論のない規範的ousiaであるという主張は受け入れがたいものである。

しかし，感覚的ousiaiが探求の場とされるという主張は，どう解すべきであろうか(1029a33

-34; 1042a24-25)。それらを研究することによって，ousia であるとはどういうことか理解しようとする，ということではないのか[38]。これに対する答えは，「研究」によって何を理解するか，ということにかかっている。もしも「研究」によって今日の科学的研究とか分析のようなものを考えるとしたら，答えは「否」である。そもそも直前において（1029a31-2)，感覚的個物は，hustera kai dêlê（より後であり，明らかである）ということで考察から外されているのである。従って，研究する，あるいは考察する，と言っても，直接の研究・考察対象とする，ということではない。探求の場とされる，ということの意味は，次の 1029b3-12の「本性的に第1で，本性的によりよく知られうるものが，我々との関係ではより少なく知られているものであり，それゆえ，我々は，本性的には第1でなくても，我々との関係ではよりよく知られているものから出発しなければならない」という主張に照らして理解できるであろう（cf. gar, b3)。すなわち，感覚的 ousiai は，我々にとってよりよく知られている ousiai であるから，たとえ第1の意味での ousia ではないとしても，それを手掛かりに，第1の意味での ousia に向けて哲学的探求を進めていくことができるのである。そして，それはまた，プラトンなどが立てるイデアや数学的対象といった，感覚によって確かめられないものを手掛かりとすることなしに――2章で取り上げられている ousia の候補の内，感覚不可能なものを基本に据えることなしに――探求を進めていくという意味をもつのであろう。また，感覚的 ousiai は，一般に認められている ousiai として，アリストテレスがしばしば哲学的探求の出発点に据える endoxa としての意味ももつと考えられる。この endoxa は，今述べたごとく，探求の出発点になるとともに，探求と吟味を経てなお持ちこたえる場合には，十分な証明が与えられたとみなされるようなものなのである（*Top.* A1, 100b21-3; 101a36-b4; *EN* H1, 1145b6-7)。

VI－III. logos と認識において第1なるものとしての ousia：《問題D》《反論3》への対処

《反論3》への応答において，本論文第I章の《問題D》の三問題の内の二つ――logos において第1，認識において第1とは，それぞれいかなることか――に答えなければならない。まず，ousia が logos において第1のものであることの理由として，アリストテレスは次のように語っている。「各々のものの logos の内には，ousia の logos が内在しなければならない」(1028 a35-6)。ここで問題にしたいのは，(i) logos が定義を意味するのか，それとも言及という程度の意味でよいのか，またこれと関連して，(ii) 各々のもの（hekastou, a35）が，定義の対象となるようなものを指しているのか，それとも定義の対象とならないようなものも含んでいるのか，ということである。ところでアリストテレスは，logos および horismos を次のように説明している。まず，logos であるからといって，定義（horismos）であるとはかぎらない。logos は，語（onoma）のあるところには「これにはこれが属す」という形で成り立つが，horismos は本質（to ti ên einai) を述べたものであり，本来的には ousia についてのみ成り立つ（Z4, 1030a14-7; b5-6)。また，ousia 以外のものについても，ある意味では horismos は成り立つが，

(a) ousia について成り立つのと，(b)「白」など他のカテゴリーのものについて成り立つのと，(c)「白い人間」など，異なるカテゴリーのものが結合して一つになっているものについて成り立つのとでは意味が異なっている（1030a17-27; b4-13; Z5, 1031a1-11)。

そこで，(i) 1028a35 で言われている各々のものの logos は，上記の (a) (b) (c) のいずれかの意味で horismos と呼べるようなものなのか，(ii) また「各々のもの」(hekastou) は，(a') ousia, (b')「白」一般，(c')「白い人間」，(d') 目の前の何かに属している限りでの「白」，のいずれを表すのかということが問題となる[39]。この内，新しく付け加えた (d') は，定義が普遍的な形相・種について成り立つものである以上（Z11, 1036a28-9)，定義の対象とはなりえない。ところで，1028a35-6の文脈からして，hekastou が (a') を表すことはありえない。Burnyeat et al.,pp. 5-6は，ton têsousias (logon) (a35) を「ousia である個々の事物の定義」ではなく，「ousia そのものを説明する定義」と定めた上で，hekastou が表すものの例として，(e') planet, yellow (我々の (b') に相当)，(f') quality の三つの可能性を検討している。議論の詳細には立ち入らないが，結局彼らは，planet, yellow という可能性が抱える困難を指摘した上で，hekastou は tôn allôn katêgorêmatôn (a33) を受ける表現であるとして，(f') quality を採用する。こうして，quality の定義は，ousia の定義を含まなければならないという意味で，ousia は第 1 であることになる。

しかし，hekastou が tôn allôn katêgorêmatôn を受けるとしても，tôn allôn katêgorêmatôn は，普遍としての quality とか quantity 一般を表すのであろうか。むしろ，個々の事物に属している限りでの白 etc. を表すのではないか。なぜなら，ousia が tôn allôn katêgorêmatôn と比較されて，後者は chôriston ではないのに対して，ousia (hautê, a34) は chôriston であると言われるとき，普遍としての ousia のことではなく，ousia であるところのもののことを言っているからである。従って，比較が成り立つためには，tôn allôn katêgorêmatôn も，性質とか量一般ではなく，性質であるものとか，量であるもののことを言うのでなければならない。だとすると，hekastou (a35) = tôn allôn katêgorêmatôn は，(b') ～ (f') の内，(b') あるいは (d') を表すのでなければならない[40]。では (b') (d') のどちらを選ぶべきか。hekaston（各々のもの）は，a36 でも言及されている。この時は，目の前の具体的事物（個々の token としての人間）のことが言われているのか，それとも，人間一般（type としての人間）のことが言われているのか。後に示すが，a36 の hekaston は，人間一般のことを指すとは考えにくく，むしろ，目の前の具体的な人間のことを指すと考えられる。だとすると，a35 の hekastou も，色一般とか，白一般，黄一般を表すのではなく，個々の事物に属している限りでの白 etc. を表すと考えるべきである。こうして先の問題 (ii) について言えば，hekastou は，定義の対象とならないようなものを表すことになる。そして logos は，何かを述べ説明する logos ではあっても，定義ではないことになる。だとすれば，ton têsousias (logon) (a35) も，定義である必要はないのではないか[41]。

では，我々は，ousia が logos において第1であるという主張をどう解するのか。例えば，目の前の特定の「白」であれ，何か特定の量であれ，ousia 以外のものをだれかに説明する必要がある場合には，最も有効な方法の一つは，それが何に属している白であり，何に属している量であるかを説明すること，つまり，それが属しているものが何であるかを説明することであろう。もちろん，これが目の前の「白」を説明する唯一の方法ではない。「白」がいかなる色合いの白であるか，他の白との比較を通して説明することも可能である。しかし，目の前の「白」を，それがいかなる色合いのものであるか説明するなら，この「白」の説明は，その存在の如何と関係のない抽象的な説明になってしまう。Z巻1章全体の議論においては，ousia 以外の他のカテゴリーの諸属性は，ousia に依存して存在するものとして語られていた。そのような他に依存しているものは，それが依存している相手を通して説明されるべきものであろう。ousia に依存して「ある」と呼ばれる諸属性の説明においては，依存する相手の ousia が何であるかが説明されなければ，説明されたことにはならないのである。

次に，「認識における第1」に関しては（1028a36-b2），我々は次のように考える。各々のものを我々が知ったと思うのは，もしもそれが人間であるなら，その人間であるものが何であるか――つまり，それが人間であること――を知ったときであって，それがこれこれ様のものであるとか，それがこれこれの大きさのものであるとかを知ったときではない。これこれ様のもの(として知られたもの)についても，それを知ったことになるのは，それが何であるかを知ったときであるのだから。例えば，1028a20-29で用いられていた「歩いているもの」の例を用いるなら，「だれか人間が目の前で歩いているとき，その目の前のものを知るのは，それが歩いているものであることを知るときではなく，それが人間であることを知るときである。なぜなら，歩いているものについても，それを知ることになるのは，その歩いているものが何であるかを，つまり，それが人間であることを知るときなのであるから」という意味である。こう解釈すれば，我々の同定解釈に完全に適合する[42]。

そこで問題は，ここに第2実体を読み取る解釈とどちらが優れているか，ということになる。少なくとも，同じ章に現れる「歩いているもの」の事例を用いることができる点では，我々の解釈の方が優れている，と思われる。それにまた，第2実体を読み取る解釈には次の困難が生じてくる。まず確認しておきたいのは，いかなる解釈を取るにせよ，1028a37 の to poion ê to poson ê to pou は，ti esti to poion ê to poson ê to pou の省略形ではない，ということである。一つには，もしそうだとしたら 28b1-2の「autôn toutôn ... hekaston（＝to poion ê to poson ê to pou）を知るのも，ti esti to poson ê to poion を知るときである」という発言は，「ti esti to poion ê to poson ê to pou を知るのも，ti esti to poson ê to poion を知るときである」という同語反復になってしまうからであるし，また，ti esti ho anthrôpos を知ることと，to poion ê to poson ê to pou を知ることとは，――後者が ti esti to poion ê to poson ê to pou を知ることであれば――別の物事について成立する認識であることになり，「各々のものを知ったこと

になると考えるのは」(1028a36) によって要求される「同一のものについての認識の比較」ということと合わなくなってしまう。むしろ，to poion ê to poson ê to pou(1028a37-b1) は，to ti esti ないしは to ti(1028a14)[43]が ti esti の名詞化であるように(a14)，poion esti ê poson esti ê pou esti の名詞化であると――すなわち，何であれ ti esti (a37)の主語になっているものについて，いかなるものであるか，どれだけの大きさ・量のものであるか，どこにあるかが尋ねられていると――考えるべきである。だとすると，ti estin ho anthrôpos を知ることが，人間が何であるかの普遍的真実を知ることを意味しないことは明白である。なぜなら，ho anthrôposが定義の対象になるような普遍的人間であるとしたら，それについて，いかなるものか（例えば，知識をもちうること）を知るとか，どれだけの大きさのものか（大きくても，せいぜい身長二メートル数十センチ）を知るということは言いえても，どこにあるか (pou, b1) を知ることはまったくできないからである[44]。こうして，ti estin ho anthrôpos を知るという発言の内に，第2実体への言及を読み取ることはできないことになる。

しかし，1028a37を人間の定義を知ることとして解することができないとしても，すでに人間であると知られたものが何であるかを知る――この人間が（例えば）ソクラテスであると知る――という意味では解釈できないであろうか。こう解釈しても，1028a36-7は，この人間が何者であるかを知ることの方が，この人間がどこにいるかを知ることよりも，よりよくこの人間を知ったことになるという意味の表現として，理解可能なのではないか。この問題は，次の《反論4への応答》とも関係してくる問題である。

VI－IV．哲学史の中での ousia 探求の位置付け：《反論4》への応答

《反論4》は，ti esti を同定の問いとしたとき，我々の同定解釈によれば，同定は，目の前のもの（tode と指定されたもの）を（例えば）「人間」と同定する場合に当たることになるが，「ソクラテス」と認知するような同定はアリストテレスの念頭にないのか，という反論であった。これに対して我々は，アリストテレスはそのような同定は考えていないと解釈する。後に《反論5》への応答において明らかにするが，Z巻3章の ousia の四候補は，「人間」のような同定だから候補となるのであって，「ソクラテス」のような同定であれば，候補となりえないのである。それだけではない。ti esti に対する答えとして，アリストテレスが「ソクラテス」を考慮から外すのには，それなりの理由があると思われる。

そもそも，「ソクラテス」と答えたとき，その答えは，ti esti という問いの答えになっているのであろうか。これはもちろん，この問いが何を意図しているか，ということと関わってくる事柄であるが，今かりに次の状況を考えてみよう。目の前に何かがあって，それは人間であり，「ソクラテス」という名前をもっている。ある人Aが，目の前のものがまったく認識できないために，ともかく何らかの形で目の前のものを同定したいと考え，別の人Bに「これは何か」と尋ねたとしよう。そこで，BがAに「ソクラテス」と答えた場合に，もしもAがソクラテス

と既知の間柄であったら，問いは答えられたことになるであろう。しかし，その時，Aは同時に「何だ，人間だったのか」と思うのではないか。また，Aがソクラテスを知らず，それが一般に何の名前として用いられているかも知らなかったら，彼は「ソクラテス」という答えを聞いても，何の理解も得られず，再度，「ソクラテスとは何なのか」と聞くことであろう。そして，例えば「人間の名前である」と聞けば，納得することであろう。このことは，ti esti が，「これは何であるか」を問う問いであるとした場合に，「人間」という認識なしに「ソクラテス」という答えでは不十分であり，「人間」に加えて「ソクラテス」という答えは必要ない，ということを示してくれる。それにまた，人間のそれぞれは(また家畜としての牛や馬も)，社会生活の必要上，名前をもっているが，狼や空の鳥を前にしたときはどうであろうか。遠くの何かを指して ti esti という問いが出されたときは，「狼」とか「鳥」と答えるのではないか。ti esti の答えとしてアリストテレスが提出している「人間」や「神」(Z1, 1028a17-8) は文字どおりそのままに，「人間」「神」として (「ソクラテス」「ゼウス」としてではなく) 読むべきであり，また彼は，個々の人間や個々の神の名前は答えとして考えていないとみなすべきであろう。

そしてさらに，1028a36-7についても次のことが言えるであろう。続く 1028b2-4において，アリストテレスは過去の哲学者たちによる「あるものが何か」(ti to on) の探求と，自分の ousia 探求とを重ね合わせている。kai dê kai (and indeed) という語から，過去の哲学者たちの探求は，それに先立つアリストテレスの議論を受ける形で取り上げられていることが分かる。では，この語の前後の議論は，具体的にはどのような仕方で関係しているのであろうか。二つの可能性が考えられる。(a)その直前で，我々がそれぞれのものを知ったことになるのは，それが何であるかを知ったときであると言われている。つまり我々は，これこれ様のものであるとか，これこれの大きさのものであるとかを知っただけでは満足しないで，何であるかを探求し続ける。そして実際 (kai dê kai)，過去の哲学者たちも含めて，常に探求され続けてきたのは，この「あるものが何であるか」なのである。(b)ousia は，時間と logos と認識という点で第1のものである (1028a32-35)。そして実際 (kai dê kai)，これが第1のものであるから，過去の哲学者たちも含めて，人々は常に，「あるものは何であるか」という形で，ousia を探求の的にし続けてきたのである。(a)と(b)のいずれを選ぶべきであろうか。我々は(a)を選びたい。なぜなら，(b)では，b2-6のテクストの表面に現れていない「第1のものである」ことを，解釈のために補わなければならないし，また補ったとしても，過去の哲学者たちによる「あるものが何であるか」の探求の背後に，「ousia が第1のものであるからそれを探求する」という (意識的，あるいは無意識的な) 動機・理由を読み取るのは適当かどうか疑われるからである。別に，第1のものでなくても，ただ単に，何であれ知りたいという欲求に促されて探求することもありえるであろう[45]。その点，(a)の読み方だと，これこれ様のものであることを知っただけでは満足しない我々の知識欲が，「あるものとは何か」を探求する人類一般の知識欲に直接的に結びつけられていることになり，解釈上の問題は何も生じてこない。そして，人類一般の知識欲に

結びつけられるような問いは，(i)と(ii)の内，目の前のものが人間かどうか，を尋ねる(i)の問いであって，目の前の人間が何者か，を尋ねる(ii)の問いではないであろう。

しかし，なおも次のように問われるかもしれない。(i)の問いは，過去の哲学者たちの探求の歴史の中に位置付けられるような重みのある問いであろうか。目の前のものが何であるかという問いに対して，「人間」と答えることなど，哲学的思考を必要としない，だれにでもできる答えではないか。これに対しては次のように答えることができよう――本当にそうだろうか。アリストテレスならば，普通の人が何の疑問も感じないようなところに問題を見出すことができるのではないか。そもそも，過去の哲学者たちの幾人かは，人間を前にして「これは何であるか」と尋ねられたときに，必ずしも「人間」とは答えなかったのである。タレスなら「水」と答えたであろうし，原子論者なら「原子」と答えたであろう[46]。従って，過去の哲学者たちとの対決の中で自分の立場を切り開いていこうとするアリストテレスにとっては，人間を前にしたときの「これは何であるか」という問いに対する答えとして，「人間」は，「水」とか「火水風土の寄せ集め」とか「原子の集合」とか，さらには「歩いているもの」とか「頭と手と足」など，さまざまの回答の中の選択肢の一つであって，もしも一般の人々の意見(endoxa)にならってこれを採用すべきであるとしたら，過去の一元論者や多元論者がそれぞれ自分の答えの理由を示したように，その理由を提示しなければならなかったのである。そういう意味で，答えが自明のように見える「これは何であるか」という問いも，過去の哲学者たちの探求の内に位置付けられるべき問いなのである。また，ここから我々は，Z巻3章のousiaの四候補――本質，普遍，類，基体――が登場する次第はどのようにして説明できるか，という《反論5》に対しても答えることができる。

VI－V．原理としてのousia：《反論5》への応答

2方向解釈の論者は，tode tiが指標となる個物の方面の探求を，基体に関するZ巻3章の探求の内に認め，ti estiの探求をZ巻4章以下の本質，普遍，類に関する検討の内に認める。確かに，「他のものがそれについて（kath'hou）語られるが，それ自身はもはや他のものについて語られないもの」という基体の説明.（1028b36-7, cf. *Cat.* 2a11-9）は，基体と個物の一致ないしは重なり合いを示唆する。しかし，続く1029aff.の議論においては，基体の候補として質料，形相，両者の合成体が挙げられ，その後，基体をどう解すべきかという問題の検討（a7-26），基体の一候補――質料――をousiaとみなすことの否定（a26-30），を経て，形相と合成体がousiaの候補として残され，さらに合成体も研究の外に置かれるという形で（a30-32），結局，形相が，ousia研究のための検討対象として残されている。注意しなければならないが，形相は基体の一候補として登場しているのであり，質料を基体とみなすことは否定され，合成体も考慮の外に置かれてはいるが，形相が基体である可能性は否定されていないのである。従って，2方向解釈が，Z巻3章の基体を扱った議論において，toiondeの（形相）から切り離されたtode

(個物)が探求課題となり，その探求が失敗した後を受けて，toiondeに話が移行していると主張するのであれば，それは誤りである。むしろ，todeともtoiondeとも解釈されうる基体が問題となり，基体をtoiondeから切り離すだけでなく，todeからも切り離してしまい，基体を裸の質料に還元してしまうような基体解釈が，斥けられているのである。また，Z巻4章で，本質の検討に移行するのも，todeを追求していって失敗したから，今度はtoiondeの方へ向かうということではない。むしろ，Z巻3章における基体の検討の延長上に，形相が残され，その形相を手掛かりに本質がousiaの候補として取り上げられている，と考えられる(1029a32-33, b1-3)[47]。このような議論の構成は，Z巻執筆当時のアリストテレスにとって，基体即個物という *Cat.*の理解は，必ずしも自明のことではなかったことを示唆する。

では，我々の同定解釈によって，Z巻3章でousiaの四つの候補が登場する次第は，どのように説明されるのか。先にも述べたように，「これは何であるか」という問いに対して，アリストテレスが一般の人々の意見にならって「人間」と答えるなら，彼は，タレスが「あるものは何であるか」(ti to on) という問いに対して「水」と答え，「これは何であるか」という問いに対しても「水」と答えることになるのとは，意識的に違った立場を採っていたことになる。従って，(実際にタレスがそう答えたかどうかはともかく) タレスなら「自分は質料こそousiaであるとみなしているから，そう答えるのだ」と答えたであろうように，アリストテレスも「ousiaとは・・・であるから，このものを前にしたときには『人間』と，このものを前にしたときには『馬』と答えるのだ」と，答えなければならない。その意味で，「あるものは何であるか」(ti to on) という問いは「ousiaとはいかなるものであるか」(tis hê ousia)という問いに行き着き(1028b4)，アリストテレスはousiaの候補として四つのものを検討するのである(Z3ff.)。すなわち，「これは何であるか」という問いに「人間」と答えるとき，目の前のものが備えているさまざまの位相の内，我々が着目しているのは何であるか——目の前のものが備えている種々の属性を支えている「基体」か，目の前のものの「本質」か，目の前のものと他のものとの共通性である「普遍」か，それとも，目の前のものが分類される「類」か——という形で四候補が俎上に載せられているのである。そしてまた，四候補の検討は，先に示したように，いわゆる感覚的ousiaのいずれが，本当にousiaであるかを決定するための規範の模索でもある。

しかしここから，次のような疑問が提起されるかもしれない。タレスにとっての「水」はousiaであるのか，むしろ原理 (archê) ではないのか。アリストテレスにとっても，感覚的個物がousiaであって，四候補は原理にすぎないのではないか。Witt, pp.116-7は，アリストテレスがthe cause of being (i.e. form or essence) をthe substance of each thingと呼んでいること(1041b25-8)は，ある種の驚きを与えるものであると語り，その説明を試みている。しかし，驚きを与えるとすれば，それは，感覚的個物を *Cat.* の実体論にならって，基本的な第1の実体とみなすからである。アリストテレスは，確かに感覚的個物についてもousiaという語を用いる(Z2, 1028b29; 31; Z3, 1029a30; 33-4; Z17, 1041a9; b 29)。しかし，ousiaは「第1の意味である

もの」である，という彼の見解に立つとき（cf. Z1, 1028a30），感覚的個物を ousia たらしめている原理こそが，本来の意味で ousia と呼ばれるのである。H1, 1042a5ff.においては，ousiai の原因（ta aitia），原理（hai archai），構成要素（ta stoicheia）が探求されると言われた後，その探求が，何が ousia であるかという形で続けられているし，また，Z3, 1028b34-6において ousia の候補とされているのは，いずれも原理的資格をもつものである[48]。基体の一候補であった合成体（感覚的個物）が，後なるものであり，明らかであるものとして（hustera kai dêlê, Z3, 1029a31-2），考慮の外に置かれる理由もここにある。アリストテレスは，感覚的個物を ousia たらしめている原理的な第１の ousia を探求している。感覚的個物は，後なる ousia であり，そのようなものとして我々には明らかであり，よく知られていても，それは本性的な明瞭性，可知性ではない。しかしまた，我々との関係でよりよく知られるものであるから，探求対象としては考慮の外に置かれるが（apheteon, 1029a31），探求の手掛かりとしては（en tautais, a34）有効なのである（a33-b12）。

しかし，感覚的個物を ousia たらしめる原理を，本来的な第１の ousia とする態度は，アリストテレスの思想的態度として許容できるのであろうか。同名同義（synonymy）と同名異義（homonymy）の間に第３の道としての focal meaning を認めない *Cat.*時代のアリストテレスであれば，その態度は許容できないものであったかもしれない。感覚世界の人間を人間たらしめている原理を，本来的な「人間」とするプラトンのイデア論に対して，アリストテレスが「第３の人間」論によって批判を行った当時であれば，同様の批判を招くような ousia 論は提起できなかったであろう[49]。しかし，すでに Γ 巻において，on hê (i) on に関する普遍的な探求を行うと表明し，さまざまの on（あるもの・存在）が，一つの原理，ousia と関係することによって on と呼ばれうること（on に関する focal meaning の立場）を，はっきりと自分の立場として表明した *Meta.* のアリストテレスにとっては（Γ1-2, 1003a21-b19），この世のすべての存在をそれらがまさに存在するかぎりにおいて問題とし，それら存在の原理（第１の ousia）を探求する道は開かれている。そして，その探求がＺ巻において遂行されているのである。

しかし，Γ 巻に関係づけて，Ｚ巻を解釈しようとする我々の試みは，なおも次のような反論を受けるかもしれない――Γ 巻２章では，さまざまの on が ousia との関係で on と呼ばれると書かれており，さまざまの on が一つの on との関係で on と呼ばれるとも，ましてや，さまざまの ousiai が一つの ousia との関係で ousia と呼ばれるとも書かれていないではないか。確かに，Γ2, 1003b6-10を見るかぎりでは，感覚的個物としての ousiai が焦点となって，それとの関係で，感覚的個物は ousiai であるから onta と呼ばれるし，諸々の属性は，ousia の諸属性であることから onta と呼ばれる・・・と記されていて，感覚的個物の原理となる ousia は焦点となっていないようにも思われる。しかし，注意してみると，focal meaning の焦点となるものは「原理」（archê, b6）であると言われ，そして，説明の最後においては，「哲学者は，ousiai の原理（archai）を捉えねばならない」（b18-9）と言われているのである。すなわち，感覚的個物は，

個物に依存する他の「あるもの」，つまり諸属性などの焦点とはなりえても，それはまだ焦点としては大まかなものであって，本当の焦点——原理——ではないと考えられる。この点で，事例として提出されている hugieinon(healthy) や iatrikon(medical) に比べれば，on に適用された場合の focal meaning の方がはるかに複雑な構造をもつことになる——(1)原理的 ousia があって，第1の on と呼ばれる。(2)感覚的個物は，その ousia との関係において ousiai とも，onta とも呼ばれる。(3)諸々の属性等々は，(2)の ousiai との関係で onta と呼ばれる。このような2段構えの重層的構造を読み取ることは，不可能ではない。なぜなら，テクストそのものの内に，同様の関係への示唆が認められるからである。すなわち，(4)あるものは，(2)の ousia との関係で語られるもの (tôn pros tên ousian legomenôn, b9,＝(3)の onta) を生み出すことの故に，onta と呼ばれるのである (b8-10)[50]。

Cat. においては個物の実体性は明白であった。それが，*Meta.* においては変わってきている。その原因は，今述べた focal meaning に関するアリストテレスの思想的進展にも認められるであろうが，またしばしば注意されているように，『オルガノン』では現れていなかった質料概念の導入にも求められるであろう[51]。Z巻3章の議論が示すように，ousia を基体と考え，基体とは他のすべてがそれについて語られるものとみなす場合には，ousia から中身がなくなり，結局，「何か」とも，「これこれの大きさ」とも，「これこれ様のもの」とも言えない質料が，ousia になってしまう。そして実は，*Cat.* において，感覚的個物が第1の実体とみなされた理由も，ousia とは基体となるものであり，基体とは他のすべてがそれについて語られるものであると考える立場にあったのである (2a11-14; 2b15-17)。基体とは何かということを不明のままにしておいて，「基体について語られるすべてのもの」の内に何もかも (基体を構成するはずのものまでも)含めるならば，そして，その状況のもとで，ousia を求めて，現にあるものから何もかもすべて同等に剝ぎ取っていくとしたら (Z3, 1029a11-12)，結局何も残らないことになる。この世界のそれぞれの事物には，他のすべては剝奪できてもそれだけは剝奪できない何か——それを奪い取ったら，各事物がそのものでありえなくなるような何か——がなければならない。それが，それぞれの事物の中核であり，それぞれの事物の ousia であり，それぞれの事物にとって第1のもの，原理なのである。そして，それが，その事物を前にしたときの問い「これは何であるか」に対する正しい答えとなるものなのである。

Ⅶ. 時間において第1なる ousia：《問題D》の決着

ousia が logos において第1のものであり，認識においても第1のものであることは，すでに説明したが，ousia が時間的にも第1のものである次第を示す課題が，まだ残っていた。しかし今や，以上のことを踏まえてこれも説明できると思う。時間的に第1であるとは，他のカテゴリーの諸属性はいずれも離れて存在できないが，ousia だけがそれが可能であるということで

あった(Z1, 1028a33-4)。それは ousia が，それぞれの事物の中核をなしているからである。x（これをある特定の人間であるとしよう)は，他の個々の属性はなくても――つまり色が白くなくて（黒くて）も，背が高くなくて（低くて）も――人間でありうる（ousia の離在可能性）が，人間であることなしには白かったり，背が高かったりできない（他の諸属性の離在不可能性)。その意味で，xは，現在有している諸属性をもつ以前に，まず人間であったのである。つまり，xは人間になることによって，この世に誕生したのであり，その意味でいかなる諸属性よりも，時間的に先（時間的に第1）なのである。

しかし，これに対しては，xが人間となった瞬間にもっていた属性と比較すればどうか，という問いが投げかけられるかもしれない。もちろん，誕生の瞬間に，すでにxは何らかの属性をもっているのであり，それはxが人間となるのと同時に所持される属性である。しかし，〈人間〉という特徴を除けば，xがもつ属性は時事刻々と変化していき，ただxが人間であることだけが，xが生きて存在しているかぎり変化しない[52]。その意味で，この世に存在するすべてのものについて，生まれた瞬間の一点を除き，それが存在するかぎりの全時間にわたって，ousia が他の属性より時間的に先であると言えるのである。

しかしなおも，次のような反論がなされるかもしれない。すなわち，この我々の解釈を採る場合には，個物に個別的な属性を想定せざるをえないのではないか。Burnyeat et al., p.4は，例えば白さは，x以外の人の内でも存在しうるから，白さをxの個別的な白さ(particularized qualities)に限定することによってのみ，諸属性がxから離在不可能であることを主張できると論じている。ところが，彼らが指摘するとおり，そのような個別的属性をアリストテレスが自分の見解としてもっていたかどうかには，異論がある。このような異論のある論点を持ち込まざるをえない解釈は，斥けられるべきではないか。しかし，これに対して我々は次のように答えることができるだろう。我々の解釈が問題にしているのは，諸属性が〈xから〉離在可能であるか不可能であるか，ということではない。むしろ，諸属性が〈ousia から〉離在可能であるか不可能であるかということを，問題にしている。つまり，ousia として「人間」を例にとるなら，xにおいて，その諸属性が〈人間から〉離在可能かどうか，ということである。ousia の離在可能と，付帯的属性の離在不可能に関して提示された次の二つの主張は，区別されねばならない。(1)「xは，それがたまたまもっている『白さ』『背の高さ』なしにも存在しうるが，xの個別的な『白さ』や『背の高さ』はxなしには存在しえない」。(2)「xは，たまたま白かったり背が高くなかったりしても人間であるが，人間であることなしには，白かったり背が高かったりすることはできない」。(1)の主張は，真であるために particularized qualities への言及を含んでいるが，(2)の主張はそのような言及なしで正しい。そして，アリストテレスは，ousia が時間的に第1であるということで，この(2)の主張をなしているのである。

注

1) 本論文で参照するアリストテレス著作名の省略形は次のとおりである。*A. Pst.*:『分析論後書』; *Cat.*:『カテゴリアイ』; *EN*:『ニコマコス倫理学』; *Meta.*:『形而上学』; *Phys.*:『自然学』; *SE*:『詭弁論駁論』; *Top.*:『トピカ』。本文,および注で言及している研究論文および研究書については,文献表とそこに記した略称を参照されたい。

2) Owen (PG), pp.280-281, 287. アリストテレスの目的を Owen がこのように解釈する背後には, naming とか unique reference における description の有効性に関して,現代の哲学者たちが是と非の二つの方向に分かれ進んでいる状況と,アリストテレスの戦略とを比較して見ようという意図がある (cf. pp.281-3)。この意図自体は非常に興味深いものであるが,しかし,このような枠組み設定の適切性については,たとえ共通点がいかに多くても,警戒してかからねばならないであろう。アリストテレスが,例えば,Russell と同じ問題意識をもっていたとはにわかには信じられないのである。

3) Code, pp.4-8. 他にも,Ross (AM), vol.2, pp.159-160や,Burnyeat et al., p.1などを参照されたい。

4) 問題A～Dは,後に取り上げる解釈上の問題を示す。

5) あるいはむしろ,「ti esti の問いに対する答えとなるもの」と言った方が分かりやすいかもしれない。

6) Frede/Patzig, vol. 2, p.19は,mâllon を「より一層」ではなく「むしろ」の意味でとっている。この問題は,本論文の問題とは直接の関係がないし,我々の解釈が,どちらを採用するかによって左右されることもないので,特に扱うことはしない。

7) 1028a29-30の dia tautên (=hê ousia kai to kath'hekaston, a27=to hupokeimenon, a26) kakeinôn hekaston estin が,ta d'alla legetai onta tô(i) tou houtôs ontos ta men posotêtes einai, ... (a18-20) と内容的に同じことを繰り返していることに注意されたい。

8) Cf. "in this primary sense" (ad.loc.) in Ross (WAM).

9) 「to ti estin」=「そのような仕方であるもの」という等式が成り立つことは,Frede/Patzig, vol. 2, p.18, note on 1028a18 も指摘している。

10) Frede/Patzig, vol.2, pp.11ff.

11) 例えば,ある人がソクラテスを指して「これは人間である」と言った答えを,第三者が「ソクラテスは人間である」と言い直した場合。

12) もちろん,これは一般的に言っての話であり,他の状況も考えることはできる。例えば,質問(b)に対して,「これはソクラテスである」と答えられたが,質問者には「ソクラテス」と言われても何のことなのか分からなかったり,あるいは,質問者の意図が固有名を尋ねることにはなかったりしたために,(a)「ソクラテスとは何であるか」と再度,質問者が尋ね,それに対して(a')「ソクラテスとは人間である」と答えられることもある。また,質問(a)(b)に答えるのに,必ずしも「人間」を用いる必要はなく,(b)に対しては先の場合のように「ソクラテス」を用いたり,(a)に対しては「動物」を用いたりすることもできる。しかし,大筋では,(a')は(a)に対する答え,(b')は(b)に対する答えと言うことができるであろう。

13) もちろん,これも一般的に言っての話であり,先の注に示したように,「ソクラテス」と言われても何のことか分からず,「ソクラテスとは何か」と尋ねる場合もあるし,あるいは,ソクラテスは「プラトンの師」「獅子鼻で出目の男」「哲学者」「毒杯をあおいで亡くなった人」「人間」「動物」等々であるとの理解を踏まえて,「これらの内,いずれがソクラテスの付帯的性質ではなく,まさにソクラテスをソクラテスたらしめている特徴であるか」という意味で「ソクラテスは何であるか」と尋ねることもありうる(これが,ti esti の問いの意図として,Frede/Patzig が考えているところである)。

しかし，今ここでは，本文に記したとおり，「ソクラテスは何であるか」という質問が，しばしば(それもたいていの場合)，ソクラテスは何に分類できるかという内容の質問であることが確認されればそれで十分である。

14) もちろんこの場合にも，目の前のものが例えば「ソクラテス」であるとの了解のもとに，「ソクラテス」という語を用いないで「これ」という指示代名詞を用いて，了解されているものの分類を求めることもありうる。しかし，その場合には，すでに何らかの手段で，目の前のものがいかなる了解の上に立って問いの対象になっているか，答え手にも明らかになっていなければならない。答え手に対して何の前触れもなく，(a)「ソクラテスは何であるか」という問いと，(b)「これは何であるか」という問いとが提出される場合には，一般的に言って，(a)においては，「ソクラテス」という言葉が答え手に既知のものであるという想定のもとに，その分類ないし規定が求められているのであり，(b)においては，目の前のものを同定することが求められているのである。

15) 広い意味での idion は，本質（to ti ên einai）を表すものと，表さないものとに分類され，前者は定義（horos）と，後者は idion と呼ばれる（*Top.* A4, 101b19-23)。アリストテレスは *Top.*において，この狭い意味での idion（しばしば ta kath'hauta sumbebêkota と呼ばれるもの）を定義した上で(A5, 102a18-19)，詳しく取り扱っているが，しばしば，idion を広い意味でも用いている(*A. Post.* A3, 73a7; B6, 93a8; *Top.* Z3, 140a33)。

16) ところで，これら二つの同定――個体を区別する同定と種類を区別する同定――に関しては，次の疑問が生じてくる。Z巻1章の ti esti が，我々の主張するように同定を目指す問いであるとした場合，アリストテレスが意図していたのは，2種類の同定の内，いずれか一方なのか，それとも両方なのか，一方であるとしたらどちらの方であるか，両方だとしたら，どちらか一方をより基本的なものとみなしたのか。この問題は，*Cat.* の第1実体と第2実体の区別を，Z巻に読み取ることの適否にも関わる問題であり，後に取り上げる。

17) ある個体をその個体として同定するために用いられる特徴は，その個体をその個体たらしめている特徴である必要はなく，その意味で，同定のための目印となるものは，いわゆる principle of individuation とは異なる。同定の問題と principle of individuation の問題の関係，および，アリストテレスが後者の問題に対してとった立場については，Gracia, pp.36-53が簡潔で，かつ興味深い。ここでは，principle of individuation の問題を扱うことはしない。個体を個体たらしめている原理の問題と，ousia を ousia たらしめている原理の問題とは原則的に異なるからである。例えばアリストテレスの場合，通常の解釈が正しいとすれば，個体化の原理は質料であるが（e.g., Ross (A), p.169)，ousia の原理は絶対に質料ではありえない。

18) この(2)の段階での同定の場合には，*Oxford English Dictionary* の in *Nat. Hist.* to refer a specimen to its proper species という説明にも見られるように，分類に非常に接近している。しかし，すでに述べたとおり，「これ」とか「白いもの」という形でしか捉えられていない個物の確定であるかぎりは分類と異なる。

19) しかし，ousia の候補の内に個物が挙げられないとしたら，このことは，我々の解釈の(i)が間違っていることを示すのではないか。この疑問に対する答えは「否」である。なぜなら，(i)では，同定される対象(目の前のもの)が個物であることを言っており，ここでは個物を同定する答え（例えば「人間」）が表すもの（ousia）が，必ずしも「個物」にはならない，と言っているだけだからである。同定においては，個物の同定である以上は，個物そのもの，あるいは個物の何らかの原理が答えとなるのであるが，その原理は個物と一致しないかもしれない。また，この原理が ousia と呼ばれるが，しかし，このことは，個物が ousia でないことを意味するわけでもない。むしろ，個物は，この原理のゆえに ousia と呼ばれるのである。そしてさらに，この2種類の区別は，*Cat.*の第1実体と第2実体の区別と一致するわけでもない。なぜなら，*Meta.*において基本となり，第1の意味で ousia であると

言われるのは，原理としての ousia の方であるのだから。これらの点には，本論文第VI章(特にVI－V）において詳細な検討が加えられる。

20) おそらく Frede/Patzig もそのような意味で解しているのであろう。vol.2, p.19を参照。

21) 「歩いている」というのは普通，動物に用いられる言葉であり，「歩いているもの」というと，何か一つの動物であるという意味合いが込められるから，むしろ「動いているもの」で考えた方がよいかもしれない。すなわち「動いているもの」というだけでは，一つのものか，二つのものかも分からないし，そもそもそこに「もの」があるかどうかも分からない。空気の一部が動いているのを見て，何か「あるもの」と見間違えることもあるからである。同じことは，「白いもの」についても言えるし，程度の違いはあれ，何が歩いているのか分からないときに，目の前の何かを「歩いているもの」と呼ぶ場合にも言えることである。

22) Lear, p.162は，hôrismenos (definite)を，substantial form を欠いているがゆえに indefinite な matter との関係で解釈し，hôrismenos とは substantial form を備えていることであると考えている。しかし，hôrismenos とか horizesthai という語自体の内に，「substantial form によって規定された」という意味があるわけではない。Z3, 1029a18; 21の用法を見るかぎり，空間的限界，あるいは質的諸属性によって規定されていることを意味するにすぎない。hôrismenos という語それ自体に，substantial form による規定との関係を求めるなら，それは過度の要求であろう（ただし，Lear がそこまで要求しているかどうかは，定かではない)。そこで問題は，1028a27を取り巻く文脈の中で，hôrismenon がどの程度の規定を意味しているのか，ということである。単なる付帯的属性による規定ではない――to badizon でさえ，その意味での規定を受けているから（また Θ9, 1049b1-2においては，hulê のみならず，pathê も aorista であると言われている)。むしろ，最少限の規定としては，我々が本文に記した意味で，他のものと区別される程度に境界づけられていること(空間的限界による規定）として理解できよう。ただし，そのために必要なもの（空間的限定を受けているものとして存在し，空間的限定を受けているものとして認識されるために必要なもの）が何であるか，と言えば，やはり「人間」等の ousia であるだろう。もしも，アリストテレスにとって，この ousia を substantial form と呼んでかまわない，ということであれば，その時はじめて，Lear のような解釈が可能になる。しかし，「人間」のような ousia は一体何であるのか――いわゆる substantial form と一致するかいなか――ということは，Z巻3章で提出される四種類の ousia 候補のいずれを採用すべきか，という問題と関わることでもあり，簡単に答えを出すわけにはいかない。

23) Lear, pp.151-2は，tode ti の解釈の困難を指摘するとともに，tode ti を最初から「個物」(a particular) と決めてかかることはできないと述べている。彼は，tode ti という表現がアリストテレスにおいて果たす基本的役割を，the ontological independence (chôristos) and definiteness (hôrismenos) of a substance を（independence と definiteness の具体的あり方は差し当たって不定のままに）抽象的に表すことに認めている。tode ti を，ti esti tode という問いによって導かれる ousia の補足的説明ととる我々の解釈は，この部分に関するかぎりでは，Lear の解釈と一致する。すなわち我々の解釈でも，ousia とは個物の同定において答えとなるものであり，それゆえ，(i)～(iv)において指摘したように，持続的で hôrismenos なものである。また，その具体的なあり方は，Z巻3章以下において四つの候補が検討されるという形で，Z巻1章においては不定のままに残されている。しかし，後に Lear が，tode ti の具体的なあり方を限定して，彼の解釈を明らかにするとき，それをそのまま受け入れてよいかどうか，疑問の点が生じてくる。彼は，*Cat.*においては個々の人間や馬が tode ti とみなされたとしても，*Meta.* Z巻の mature Aristotle においては，species-form あるいは substantial form が tode ti とみなされていると考え，tode (this) という語は，この substantial form が genuine unity であることを表す表現であると主張する (pp.161-2)。彼が genuine unity で意味しているのは，例えば人間が，「二足の動物」のように「二足」と「動物」によって定義されるにもか

かわらず有しているところの unity である(cf. Z12, 1037b8-27)。彼は，tode がこの意味での unity を表すことの根拠を，1037b27の "hê ousia hen ti kai tode ti sêmainei" という文(それを彼は "substance is a certain unity and signifies a tode ti" と訳している）に求めているように思われる。しかし，これがこの文の正当な解釈かどうか疑問である。例えば Ross (WAM), ad loc.の "substance means a 'one' and a 'this'" という訳によれば，この文は，substance と呼ばれるものが，一なるものであり，tode ti であることを言うものと解され，その場合，tode ti は，確かに一なるものであっても，tode が unity を表すことには必ずしもならない。また，Z巻1章における tode ti の役割を探るなら，テクストにはっきりと現れている tode (1028a15)を手掛かりとするのがよいと思われる。さらに，tode ti が hode ho anthrôpos, etc.の一般的表現であるとしたら（cf. Bonitz, 495b36ff., esp. *Meta.* Δ2, 1014a22-3)，「この人間」という場合に，一般の用法では，species-form を指すのではなく，現実に存在する特定の人間を指すのではないだろうか。それとも，アリストテレスは一般の用法から外れた語法を用いているのであろうか。いずれにせよ，この問題はさらなる検討を要する課題である。

24) Cf. Frede/Patzig, vol.2, p.15. ただし彼らも解釈1に傾いている。

25) 1028a27の kai to kath'hekaston という付加も，同様の意図をもつ付加として解釈できる。

26) Frede/Patzig, vol.2, p.19も，(i)の推論が自明であるかのように語っているのであるが。

27) Cf. Frede/Patzig, vol.2, p.19.

28) Ackrill, p.81は，「第1実体」「第2実体」という語は，*Cat.*以外の他のアリストテレス著作では用いられていないが，区別そのものはもちろん保持されている，と主張し，同時に，*Meta.* Z，H巻の実体論は，*Cat.* 5章よりずっと深まっていると語っている。Witt, p.63も *Cat.*の実体論を *Meta.*の内に読み取ろうとする。

29) ここの箇所は，tôn aisthêtôn ousiôn tines と読むべきであろうか，それとも，tôn aisthêtôn は中性形と解するべきであろうか。天野（p.17）は後者を採用し，tines は ousiai に引かれたのであって，「感覚対象の中のある種のもの」という限定は，色や音などを排除する役割を果していると考えている。しかし，この箇所で言及されている同意(homologountai, 1029a33)が，2章の同意(dokei ... huparchein phanerôtata, 1028b8; phamen, 10)を受けているのだとすると，tôn aisthêtôn tines は，toutôn tines (1028b14)に相当すると考えるべきであろう。ところが，toutôn は，その前の1028b8ff. で数え上げられる sômasin (b8)を受けている。だとすると，1029a34の tôn aisthêtôn の内に，色や音など，いわゆる実体のカテゴリーに属さないものを含めるのは適当ではないことになる。tôn aisthêtôn tines という形で，「幾つかの感覚的個物にかぎって ousia であることが認められている」とアリストテレスが言う理由は，むしろZ巻16章で指摘されるように，ousia であると思われているものの一部――動物の手や足などの部分や，土，火，空気など――は，ousia とみなしがたいからであり（1040b5ff.)，従って，それらの内で探求を行うなら，間違った結論に陥るからであろう。そこで次に，tôn aisthêtôn を具体的個物として解釈した上で，tines は ousiai に引かれたものとみなすべきか否か。そうみなすことができるなら，「感覚的個物をそのままアリストテレスが ousia とみなすわけではない」という意味合いを，この箇所に読み取ることもできるかもしれず，我々の同定解釈には有利に働くことになろう。しかし，この箇所以前においても，アリストテレスはしばしば女性形で aisthêtas と記しており，そこでは当然ながら ousias が補われるべきである(Z1, 1028b29; 31)。従って結局，aisthêtôn を特に中性形と解する必要はなく，Ross (AM), ad loc.のように tines ousiai と読むことには何の困難もないと思われる。

30) 他にも，1041a9; b29などを参照。Witt は，感覚的 ousiai を指して noncontroversial exemplars と言っている（p.8, cf.p.63)。

31) Owen (PG), p.288は，この箇所にそのような試みを読み取っている。

32) Code, pp.4-8.

33) Code, p6も，この箇所がB巻のアポリアと関係あることは認めるが，しかし，M巻10章でのアリストテレスの解決は，解決になっていないと考えるところから，B巻とZ巻とを関係づけようとしている。従って，《反論6》に本格的に応答しようとするなら，M巻10章の検討がどうしても必要になってくる。

34) ここでは dilemma と解したが，Lear, p.160は，Jaeger が削除する ê kai ... katholou (1086b37-87 a1)を読んで，これを trilemma と解している。

35) Düring, pp.49-52 および Ross (APPA), p.639を参照。Dancy (1), p.338; Dancy (2), p.373は，この Ross が挙げる可能性をそのまま受け入れている。アリストテレス著作の講義録・研究ノートという性格上，彼の chronology については，プラトンの場合のような成功は期待できないと表明する Owen (Owen (AMPC), p.152) も，*Cat.*の思想がアリストテレスのアカデメイア時代のものであること (Owen (PA), p.204)，および『オルガノン』の時点では，a general science of 'being *qua* being' が登場する場面のないこと (Owen (LM), p.189) を認めている。

36) この点は諸解釈者も指摘している。E.g., Ross (AM), vol.2, p.226.

37) その他，Δ巻8章1017b10-13も，感覚的 ousiai をアリストテレスが ousia として確実視していることの根拠として挙げられるかもしれないが，この箇所も，平面，線，数 (b19-20)などが ousia の候補として挙げられているように，また legetai (b10)という語が使われているように，一般に，あるいは一部の人に思われているところを語っているにすぎない。また，自然的・感覚的個物は「万人」の承認を得ていることとして語られてはいるが (H1, 1042a6-8)，しかしその中に火，土，空気，および動物の身体の部分が含まれている以上は，万人の中にアリストテレスも含まれるとは考えにくい。さらに，H巻1章がZ巻2章の要約であるとはいっても，イデアや数学的対象を ousia とする説も紹介されているように(1042a11-12)，アリストテレス自身の結論の要約ということにはならない。この要約の内にアリストテレス自身の結論を求めるなら，1042a17の，本質が ousia であるという主張がそれになるであろう。

38) Cf. Witt, p.8.

39) hekaston の曖昧性については，Lear, p.165を参照。

40) (c') (e')は，tôn allôn katêgorêmatôn という条件に合わない。

41) Burnyeat et al., p.5は，hekastou logô (i) (a35)が定義を意味することの根拠として，M2, 1077 b3-4を挙げているが，しかし後者において logos が定義を意味するとしても，それが前者でも定義を意味することの根拠になるのであろうか。確かに，どちらも logos における priority を主張する箇所ではあるが，文脈が違う以上，両者が同じ意味で logos を使用しているとは限らず，また logos の priority についても同じことを言っているとは限らないように思われる。

42) この読み方は，Burnyeat et al., pp.6-7も採用している。

43) prôton on to ti estin (1028a14)は，「〈to ti〉が prôton on である (esti)」と読むべきなのか，それとも「〈to ti estin〉が prôton であって(on)」と解すべきなのか，決定できない。後者の読み方が正しくて，「この〈to ti estin〉が ousia なのであるが，他のものはこれに依存して『ある』と言われるから，けっきょく ousia が第1のあるものである」と議論が続くはずのところが(cf.1028a29-31)，間に1028a15ff.の hotan men ... が入ったため構文がくずれてしまったようにも思われる。その場合は，この箇所は to ti が ti esti を表す例とはならないが，しかし，事例としては他の箇所を挙げることもできる。例えば，*Meta.* E2,1026a36; Θ1, 1045b33 etc.(cf. Bonitz, p.764 a41ff.)である。

44) どこにもないことを知るというのであれば話は別であるが。しかし，kai auôn toutôn tote hekaston ismen (b1)は，pou esti にも知ることのできるような積極的内容があることを示唆する。

45) *Meta.*冒頭の「すべての人間は本性上，知ることを欲する」(A1, 980a21) を参照。

46) 両者とも，名指しではないが，一元論者，無限数のものを立てる多元論者という形で，b4-7に言及されている。

47) この議論の詳細については，また稿を改めて検討するつもりである。

48) 他にも，個物には定義は成立しないが，ousia については成り立つこと（Z15と，Z4, 1030a7-10; b4-13; Z5, 1031a10-4を比較されたい）からも，*Meta.*におけるアリストテレス自身の立場としては，個物よりむしろ，定義の対象となる原理的なものの方が ousia であることが推測される。

49) イデア論批判との関係での，アリストテレス思想発展上の focal meaning の位置付けと，それが果した役割については，Owen (LM) を参照されたい。

50) もしも単数形の ousia と複数形の ousiai に，本当の原理としての ousia と感覚的個物としての ousiai の区別を読み取ることができるなら，b17-9は次のように読めるかもしれない。「もしもこれ（i.e., 知識の対象である第1の原理）が ousia であるなら，哲学者は，諸々の ousiai の原理・原因（i.e., 第1の原理である ousia）を捉えねばならない」。しかし，そのような区別を読み取ることはできず，最初の ousia も感覚的個物として解さねばならないとしても，「哲学者が ousiai の原理を捉えねばならない」という発言は，原理としての ousia を把握しなければならないという意味を含んでいるのである。

51) Dancy (1), Dancy (2) を参照。

52) 〈二足の動物〉などの人間に固有の特徴は，〈人間〉の内に統一を保って含まれている (cf. Z12, 1037 b11ff.)。いかにして統一を保っているかは，Z巻12章で検討される。

文献表

著者名の後に記した［　］が略称を表す。

J.L. Ackrill [Ackrill], *Aristotle's Categories and De Interpretatione* (Oxford 1963).

天野正幸［天野］「アリストテレスのウーシアー論（I－『形而上学』第7巻3，4章の訳および註－」『東京大学文学部哲学研究室論集』11，1992年度。

H. Bonitz [Bonitz], *Index Aristotelicus* (Berlin 1870, 1955²).

M.F. Burnyeat et al. [Burnyeat et al.], *Notes on Book Z of Aristotle's Metaphysics* (Oxford 1979).

A. Code [Code], "The Aporematic Approach to Primary Being in *Metaphysics* Z", in *New Essays on Aristotle,* ed. by F.J. Pelletier and J. King-Farlow (Ontario 1984).

R. Dancy [Dancy (1)], "On Some of Aristotle's First Thoughts about Substances", *The Philosophical Review* 84 (1975).

R. Dancy [Dancy (2)], "On Some of Aristotle's Second Thoughts about Substances: Matter", *The Philosophical Review* 87 (1978).

I. Düring [Düring], *Aristoteles: Darstellung und Interpretation seines Denkens* (Heidelberg 1966).

M. Frede/G. Patzig [Frede/Patzig], *Aristoteles, Metaphysik* Z, 2 vols (München 1988).

J.J.E. Gracia [Gracia], *Introduction to the Problem of Individuation in the Early Middle Ages* (München 1984).

J. Lear [Lear], "Active Episteme", in *Mathematik und Metaphysik, Proceedings of the Tenth Symposium Aristotelicum,* ed. by A. Graiser (Bonn 1987).

G.E.L. Owen [Owen (LSD)], *Logic, Science and Dialectic: Collected Papers in Greek Philosophy* (London 1986).

G.E.L. Owen [Owen (AMPC)], "Aristotle: Method, Physics and Cosmology", in Owen (LSD).

G.E.L. Owen [Owen (LM)], "Logic and Metaphysics in Some Earlier Works of Aristotle", in Owen

(LSD).
G.E.L. Owen [Owen (PA)], "The Platonism of Aristotle" in Owen (LSD).
G.E.L. Owen [Owen (PG)], "Particular and General", in Owen (LSD).
W.D. Ross [Ross (A)], *Aristotle* (London 1949[5]).
W.D. Ross [Ross (AM)], *Aristotle's Metaphysics,* 2 vols (Oxford 1924, 1953[2]).
W.D. Ross [Ross (APPA)], *Aristotle's Prior and Posterior Analytics* (Oxford 1949).
W.D. Ross [Ross (WAM)], *The Works of Aristotle, vol.8, Metaphysica* (Oxford 1928[2]).
J.A. Smith [Smith], "TOΔE TI in Aristotle", *The Classical Review* 35 (1921).
C. Witt [Witt], *Substance and Essence in Aristotle, An Interpretation of Metaphysics VII-IX* (New York 1989).